

## 『享保・元文諸国産物帳』所載の サトイモの品種・品種群について

宮崎 貞巳・田代 洋丞・岳 英樹

(生物工学講座)

平成5年5月1日 受理

On the Cultivar and Its Group of Taro  
(*Colocasia esculenta* (L.) Schott and *C. gigantea* Hook.f.)  
Described in "Kyōho-Genbun Shokoku Sanbutsucho"

Sadami MIYAZAKI, Yosuke TASHIRO and Hideki TAKE

(Laboratory of Biotechnology and Plant Breeding)

Received May 1, 1993

### Summary

In the 19th year of Kyōho (1734), the shogunate directed all feudal lords to make a book on natural products of their domains, and thereby natural products including all crops were first investigated on a nation-wide scale in Japan. The books were then presented to the shogunate, but they had all been lost without knowing. The so-called "Kyōho-Genbun Shokoku Sanbutsucho" are the extant copies of the texts, the drawings and their notes of the books.

This paper is an attempt to identify the taro cultivars in "Kyōho-Genbun Shokoku Sanbutsucho" and to trace their geographical distribution in the mid-Edo period (1735~1746). In the present study, the 74 books of "Kyōho-Genbun Shokoku Sanbutsucho Shusei" (a collection of the books on natural products including almost all crops of each domain in the mid-Edo period) in 16 volumes edited by Toshitaro Morinaga and Ken Yasuda were used.

In these books, natural products are arranged in a prescribed form, but tuber crops are not consistently written. Therefore, to identify the taro cultivars in them, the authors attached importance to the entered order of their kinds, picked out the kind with the same name and compared it with that in the literatures cited. The term 'kind' was used throughout this paper to signify a general term which put a cultivar and its synonym together, because they had been used without clearly being distinguished between them in the books. The names of cultivars and their groups used in this paper were mainly based on those in "Sosaiengei Kakuron" (a book on details of Japanese vegetables) by Saburo Kumazawa.

Taros were described in 74 books from 36 provinces except for Hokkaido and Shikoku islands where the number of kinds of taro were about 70. The number of books in which each kind had been described were 44 on *Egu-imo* ; 42 on *Tōno-imo* ; 35 on *Hasu-imo* ; 29 on *Ma-imo* ; 18 on *Sato-imo*, and 15 on each of *Aka-imo*, *Shiro-imo* and *Kuri-imo*, and so on. The number of books in which the identified cultivars had been described were 53 on the *Egu-imo* group ; 21 on the *Tōno-imo* group ; 18 on the *Hasu-imo* group ; 13 on the *Hasuba-imo* group ; 6 on the *Yatsugashira* group ; and 1 on each group of *Ishikawa-wase*, *Dodare*, *Shoga-imo* and *Mizo-imo*. The description of each group and their geographical distributions are as follows.

The Egu-imo group: 'Egu-imo' was probably the most popular of taros grown in the mid-Edo period, due to better keeping qualities and ability to produce good yields even under adverse conditions. In the books there were *Egu-imo*, *Shima-imo*, *Ao-imo*, *Hanasaki*, and *Ego-imo*, *Egori-imo*, *Eguri-imo*, *Igo-imo* and *Yago-imo* which seemed to be a corruption of the name Egu-imo. At least 3 cultivars ('Egu-imo', 'Shima-imo' and 'Ao-imo') belonged to this group and ranged most widely from Mutsu province to Kyushu island.

The Tōno-imo group: 'Tōno-imo' was also known by various names such as *Bōdō*, *Aka-imo*, *Murasaki-imo*, *Akazuiki*, *Ma-imo*, *Kurokara* and *Karakuro* in different provinces. At least 4 cultivars ('Tōno-imo', 'Karatori-imo', 'Ō-imo' and 'Shirodo') were included in this group and 'Karatori-imo' was cultivated in relatively cool provinces such as Uzen and Iwashiro, while the others were distributed to warm provinces such as Shimotsuke, Hitachi, Etchu, Kaga, Suhō, Nagato, Tsushima, Chikuzen and Higo.

The Hasu-imo group: this group belongs to the species *Colocasia gigantea* Hook.f. which is closely related to the other groups *C. esculenta* (L.) Schott, and has only one cultivar 'Hasu-imo'. Its petioles are less acrid than those of any other cultivars and have exclusively been used for greens probably from before the Edo period. 'Hasu-imo' was also called *Shiro-imo*, *To-imo*, *Mizu-imo* or *Tenjiku-imo* and was distributed to relatively warm provinces such as Shimotsuke, Hitachi, Mino, Izumi, Bizen, Bitchu, Nagato, Tsushima, Chikuzen and Higo.

The Hasuba-imo group: the cultivar belonging to this group was not described under the name *Hasuba-imo*, but was known as *Kuri-imo*, *Hachi-imo*, *Mataguro* or *Yatsugashira* in the books. They were grown in Shimotsuke, Hitachi, Suhō, Nagato, Tsushima and Chikuzen.

The Yatsugashira group: 'Yatsugashira' was also called *Yatsu-kuchi* and was cultivated in Shimotsuke, Hitachi, Chikuzen, Higo and Hyuga.

The other groups: both 'Oyazeme' and 'Yogorō-imo' belonging to the Ishikawa-wase and the Dodare groups, respectively, were cultivated in Iga province. 'Shōga-imo' included in the Shōga-imo group was grown in Chikuzen, and 'Mizu-imo' in the Mizu-imo group was grown in Higo.

Key words: taro, *Colocasia esculenta*, *Colocasia gigantea*, Kyōho-Genbun Shokoku Sanbutsucho

## 緒 言

前報<sup>35)</sup>では、わが国におけるサトイモの品種の渡来、分布、変遷に関する基礎的資料を得る目的で、江戸時代の農書及び本草書類所載のサトイモと現存の品種・品種群との関係を検討した。しかしながら、江戸時代のサトイモの品種の分布については特定の時期における資料が少なく、十分な知見を得ることができなかった。

本報は、江戸時代中期に全国的規模で編纂された産物帳に記載されているサトイモについて、現存品種・品種群との関係を検討するとともに、江戸時代中期におけるサトイモの品種の分布について調査したものである。

## 調 査 資 料

調査資料として盛永俊太郎・安田 健編『享保元文諸国産物帳集成』(以下、『諸国産物帳集成』とよぶ)全16巻 霞ヶ関出版 1985—1991年刊に集録された国、領、郡、郷、村別産物帳のうち、成立年代が1735—1746年間と推定され、サトイモを含むイモ類が記載されている資料を選んだ。それらの資料名を、資料整理番号、資料が集録されている『諸国産物帳集成』の巻数及び国名(『日本史事典』<sup>59)</sup>による)とともに第1表にあげた。

調査資料数は、北海道と四国の諸国を除いた36か国（全国の約半数）の産物帳 合計74編である。

## 調 査 方 法

1. 調査資料には農作物を含む天産物の種類名が俗名を含めて一定の様式で記載されている<sup>74)</sup>。イモ類の種類名を各資料から抽出し、記載順に第1表に付記した。なお、この表中のゴシックは総称名で、( ) 内は同種類異名、・以下は付記された漢字、[ ] 内は著者が加筆したものである。

2. 『郡方産物帳』（資料整理番号12—19, 以下、番号だけを記す）と『伊賀国産物図』（52）には種類名とともに、その特性が記され、『羽州庄内領産物帳』（2）、『遠江国懸河領佐野郡榛原郡城東郡山名郡周知郡豊田郡産物帳』（28）、『周防産物名寄』（60）、『長門産物名寄』（61）及び『筑前国産物帳』（69）には一部の種類について、その特性が略記されているが、その他の資料には種類名だけしか記載されていない。また、イモ類の記載様式はそれぞれの資料によって異なっている。従って、各資料のイモ類が何れの種 species に属するかを判別するに当っては、イモ類の記載様式に基づいて類別し、各資料間の種類名を相互に比較するとともに、種類名に付記された特性及び前報<sup>35)</sup>の資料所載の種類名やそれらの特性に関する記述などを参考にした。

3. 資料中のサトイモの種類が現存品種あるいは品種群の何れに該当するかを判別するに当っては、種類名の記載順序を重視するとともに、同一種類名を抽出し、前報<sup>35)</sup>の資料や引用文献に記載されている種類名や特性などを参考にした。なお、サトイモの現存品種名及び品種群名の表記は、特に断らない限り熊澤<sup>26)</sup>の「里芋の品種分類表」中の名称に準じた。本報では、この表を一部改変して第2表としてあげた。

4. 資料中のサトイモの種類名は各資料に記された文字を用いて「」を付して表し、明治時代以降の文献中の品種名には「'」を付けた。また、資料中の、例えば「タウイモ」、「たうのいも」、「とのいも」のように、ある名称（「とうのいも」）の転訛と考えられる名称は同一名称として取扱い、それらを一括して表す場合にはできるだけ「唐芋」のように漢字で記した。なお、引用文中の[ ] 内は著者が加筆したものである。

5. ヤマノイモ属 *Dioscorea* の植物のうち、*D. japonica* Thunb. 及び *D. opposita* Thunb. については、わが国では現在でも統一した名称はない。本報では前者をジネンジョ、後者をヤマイモとよび、必要に応じてこのヤマイモを3群に大別し、長形群、扁形群及び塊形群とよんだ。

6. イモ類は、広義には、地下に球根を形成する植物と定義され、ショウガやチョロギ、ユリ、クワイなども含む。しかし、資料を通覧した場合、これらの植物は他のイモ類と区別して記されているので、本報では、後述の「調査結果及び考察」の第2節にあげた種をイモ類として取扱った。

7. 前報<sup>35)</sup>で述べたように、江戸時代には植物の分類階級が未確立で、本資料に記載された植物名が、種名、品種群名あるいは品種名のうち何れを表しているのか明確に判別できない場合が多かった。従って、本報では資料中の植物の分類単位を表わす言葉として「種類」を用いた。

## 調査結果及び考察

### 1. イモ類の記載様式

一般に、資料にはイモ類は「菜類」の項に「芋」や「薯蕷」などの総称名を付けて記されて

第1表 資料名及び資料所載のイモ類

資料 番号	産物帳集 成 巻 数	国 名	資 料 名	資 料 所 載 の イ モ 類
1	XV	陸 中	御領分産物	なかいも：山のいも，つるのこいも(つるいも)， といも：つくね，ぼろいも，へらいも，いもの こ(葉いも，からとり)。
2	XV	羽 前	羽州庄内領産物帳	芋(さといも)：白いも，赤いも，はすいも，紫 芋(たうのいも，からとり)，佛掌薯(つくねい も，つくいも，やわたいも)，薯蕷(やまのい も，長いも)。
3	XV	羽 前	米澤産物集	薯蕷類：佛掌薯，膚滑，芋：赤芋蕷。
4	XV	岩 代	陸奥国田村郡三春秋田信濃守領地草木鳥獸 諸色集書	芋：畑いも，からとりいも・紫白，ゑごりいも， つくいも(とういも)，大和いも，やまのいも(長 いも)，きりいも，ところいも。
5	II	常 陸	御領内産物留	芋：早イモ，タウイモ，ハスイモ，エクイモ， 里イモ，クリイモ，白イモ，キャウイモ，ドタ イモ，スバカネ，ハツカシラ，青カラ，山芋： 長イモ，トコロイモ，キリイモ，ツクネイモ。
6	II	下 野	下野国河内郡宇都宮領高谷林新田村産物書 上ケ帳	いも：中て一白里いも，おくて一花さきいも。
7	II	下 野	下野国宇都宮領岡本最寄拾壹ヶ村産物書上 ケ帳	里芋：はなつき(ゑごりいも)，しろいも(しん ずい)，くろいも，またくろいも(くりいも，ハ ツかしら)，とふのいも，はすいも，山芋：つく ねいも，いてふいも，ながいも。
8	II	下 野	下野国河内郡羽牛田村ほか十二か村書上げ (欠題)	里いも：ゑごりいも(花さき)，また黒，白い も，黒いも，とうのいも，ハツかしら。 山のいも：つくいも，長いも，いてふいも，か しういも。
9	II	下 野	丹羽正伯様より被仰出候品々書上帳	芋：黒いも，八つ頭，ゑごり，山のいも。
10	III	佐 渡	佐州産物志	芋(方言サトイモ)，佛掌薯(ツクネイモ)，薯 蕷(ヤマノイモ)，白芋(タウノイモ)，甘薯(リ ウキウイモ，サツマイモ，他邦ヨリ来)。
11	III	越 後	蒲原郡小川庄石間組滝谷村産物	いも類：里いも，えごいも，たういも，やまと いも，ていも，えといも。
12	I	加 賀	郡方産物帳 能美郡	いもの類：畠いも・青芋，たうのいも・紫芋， はすいも・白芋，山のいも・薯蕷，葉いも，つ くねいも・佛掌□，ところ・草薺，琉球芋・甘 藷，赤いも・紫藷。
13	I	加 賀	郡方産物帳 石川郡	たうのいも・紫芋，ゑごいも・青芋，山のいも・ 薯蕷，露ノ子いも・芋卵，つくねいも・佛掌薯， はすいも・白芋。
14	I	加 賀	郡方産物帳 河北郡	ゑごいも・青芋，つるのこいも・芋卵，とうの いも・紫芋(とうすいき)，やまのいも・薯蕷， つくねいも・佛掌薯，かしゆ・土芋，ところ・ 草薺。

資料 番号	産物帳集 成 巻 数	国 名	資 料 名	資 料 所 載 の イ モ 類
15	I	能 登	郡方産物帳 羽咋・鹿島郡	いこいも・青芋, しゃうかいも・佛掌薯(とうのいも, つくねいも), 山の芋・薯蕷, ところ・草薺, あかいも・紫芋, はいも・芋苗, かしゅう・土芋
16	I	能 登	郡方産物帳 鳳至・珠州郡	畠いも・青芋(いごいも), 唐のいも・佛掌薯(つくねいも), ところ・草薺, はすいも・白芋, はいも・芋苗, かしゅう・土芋.
17	I	越 中	郡方産物帳 砺波郡	まいも・芋卵(つるのこいも, たうのいも, あかすいき), ゑこいも・青芋(青ずいぎ), はすいも・紫芋, つくねいも・佛掌薯, 山のいも・薯蕷, はいも・薯蕷一, りうきういも・甘藷, あかいも・甘藷ノ一, かしゅう・土芋, ところ・草薺.
18	I	越 中	郡方産物帳 射水郡	まいも・芋卵(あかずいき, とうずいき, あかいも), いこいも・青芋(里いも), やまのいも・薯蕷, つくねいも・佛掌薯(ていも), ところ・草薺.
19	I	越 中	郡方産物帳 新川郡	芋: とうのいも(赤すいき, 紫芋), いこいも・青芋, こいも・芋卵, 山のいも・薯蕷, つくねいも・佛掌薯, 葉いも・芋苗.
20	I	越 前	越前国福井領産物	芋: とうのいも, まいも, ゑぐいも, 山のいも, むかご.
21	I	越 前	越前国之内御領知産物	芋: まいも, 里いも, ゑぐいも, ごりのいも, 山のいも.
22	III	信 濃	信濃国伊那郡筑摩郡高遠領産物帳	いも: さといも, とうのいも, 山いも, つくねいも, たんばいも, ころびいも, ていも.
23	III	信 濃	信濃国筑摩郡之内産物	芋: 里いも, とうのいも, まいも, ゑこいも, どんだらいも, つくねいも, こんにやく芋, 草菜類: 山のいも(しねんしやう).
24	III	駿 河	駿河国駿東郡御厨村々穀類果実山菜魚鳥獸その他書き上げ	芋: こいも, しまいも, はすいも, かはゆら.
25	III	伊 豆	伊豆国君沢郡田方郡加茂郡産物并絵図帳 君澤郡	芋: 黒いも, とうのいも, あきいも, しまいも, 小いも, 白から, ゑぐいも. 薯蕷(長芋). 山のいも(つくねいも). 薩摩芋.
26	III	伊 豆	伊豆国君沢郡田方郡加茂郡産物并絵図帳 田方郡	里いも: とうのいも, 小いも, 嶋いも, 白から, 女郎いも, はすいも. 山のいも(つくね). 長いも. 薩摩芋. [「しまいも」の絵図と註書あり]
27	III	伊 豆	伊豆国君沢郡田方郡加茂郡産物并絵図帳 賀茂郡	芋: 嶋いも, 白から, つるのこ, とうの芋. 山薯蕷: 長いも, つくねいも. 薩摩芋(赤, 白).
28	III	遠 江	遠江国懸河領佐野郡榛原郡城東郡山名郡周知郡豊田郡産物帳	芋: つるのこ, 大いも, しまいも, 八つかしら, 白がしら, 青がしら, 赤がしら, 黒がしら, はす芋, とうのいも. 薯蕷. つくねいも. かしう(ぜっふ). ところ.

資料 番号	産物帳集 成 巻 数	国 名	資 料 名	資 料 所 載 の イ モ 類
29	IV	三 河	尾張殿家老渡辺半藏在所参河国加茂郡寺領 産物	里いも、山の芋。
30	V	飛 騨	飛州志	芋：地芋、エゴイモ、トウノイモ、佛掌薯、山 薯、自然薯類、ムカゴ。
31	IV	美 濃	美濃国之内産物 羽栗郡之内	芋：とのいも、ゑごいも、まいも、ほどいも。 つくね芋：手のひら、長芋、かしう、蓮芋。
32	IV	美 濃	美濃国之内産物 各務郡之内	芋：とのいも、ゑごいも、まいも。
33	IV	美 濃	美濃国之内産物 石津郡之内	いも：黒から、白から、おやせつき、とうのい も、ところ、しねんじょ、はすいも。
34	IV	美 濃	美濃国之内産物 安八郡之内	芋：ゑごいも、白から、とうのいも、黒、青か ら、赤から、まいも、つくね芋、はすいも、何 首烏。
35	IV	美 濃	美濃国之内産物 加茂郡之内	はす芋、つくね芋、こんにやくいも、芋：とう のいも、ゑご、から黒、ところ、しねんじょ。
36	IV	美 濃	美濃国之内産物 武儀郡之内	芋：まいも、とうのいも、ゑご、つくし、から しろ、つくね芋：あぶき芋、ところ、こんにゃ く芋、じねんしゃう。
37	IV	美 濃	美濃国之内産物 不破郡之内	芋：まいも、ゑごいも、とうのいも、大すくり。
38	IV	美 濃	美濃国之内産物 多芸郡之内	芋：とうのいも、ゑご、まいも、つくねいも、 はすいも。
39	IV	美 濃	美濃国之内産物 本巢郡之内	芋：よこ芋、まいも。
40	IV	美 濃	美濃国之内産物 中嶋郡之内	芋：唐のいも、ゑごいも、まいも、つくねいも： 手のひら、蓮芋。
41	IV	美 濃	美濃国之内産物 厚見郡之内	芋：まいも、唐のいも、ゑごいも、つくねいも。
42	IV	美 濃	美濃国之内産物 可児郡之内	芋：とうのいも、ゑごいも、まいも、つくねい も、あふらきいも、しねんじょ。
43	IV	尾 張	尾張殿家老成瀬隼人正在所尾州丹羽郡犬山 産物	芋：たうの芋、ゑごいも、まいも、山のいも、 〔草類〕：かしゅう、しねんしゃう、ところ、か しいも。
44	IV	尾 張	尾張国産物 愛知郡之内	いも：さといも、山のいも、はすいも、とふの いも、ゑごいも、かしう。
45	IV	尾 張	尾張国産物 知多郡之内	いも：山のいも、さといも、かしゅういも、ほ といも、かせいも、うずまき、かしう。
46	IV	尾 張	尾張国産物 春日井郡之内	いも：はす、長いも、さといも、山のいも、や まといも、ゑごいも、とうのいも、まいも、は しかみいも、ゑちこいも、ところ、かしゅう。
47	IV	尾 張	尾張国産物 丹羽郡之内	いも：とうのいも、ゑごいも、山のいも、はし かみいも、ていも、かねてこいも。
48	IV	尾 張	尾張国産物 葉栗郡之内	かしゅう、いも：里いも、山のいも、とうのい も、ゑごいも、まいも、はしかみいも、くりい も。

資料 番号	産物帳集 成 巻 数	国 名	資 料 名	資 料 所 載 の イ モ 類
49	IV	尾 張	尾張国産物 中嶋郡之内	いも：里いも、ゑぐいも、まいも、山のいも、 長ねいも、とうのいも、くろから、てのひら、 つくね、てんとう、はすいも、おやせつき、か らくろ。かしう。
50	IV	尾 張	尾張国産物 海東郡之内	いも：里いも、山のいも、まいも、ゑこいも、 はすいも、おやせつき、かしいも、あふきいも、 しろから、ながいも。
51	IV	尾 張	尾陽産物志 海西郡之内	いも：とのいも、しろから、ゑごいも、はすい も、まいも、おやせつき、山のいも、ずくね、 あふぎいも、長いも、やまといも。何首烏。
52	V	伊 賀	伊賀国産物図	与五郎いも〔絵図欠落、註書のみ〕、親せめ〔絵 図欠落、註書のみ〕。
53	I	近 江	郡方産物帳江州御知行所今津弘川海洋之内 中村町産物帳	いもの類：里いも（青芋）。
54	V	和 泉	和泉物産	やまのいも（つくねいも）、じねんしょ、さとい も、さつまいも、はすいも、かしういも、とを のいも。
55	VI	紀 伊	紀州産物帳	里芋：都芋、栗芋、はしかみ芋、赤芋、はす芋。 薯 蓀：自然生いも、いちやういも、つくねい も。薩摩いも（りうきういも）。何首烏（ほう じ）。
56	VII	隠 岐	隠岐国産物絵図注書	佛掌薯、やまと芋、何首烏、里芋、薯 蓀、長いも。
57	VII	出 雲	出雲国産物名疏	芋：サトイモ、白イモ、エクイモ、マイモ、ト ウノイモ、小イモ、ツルノコ。薯 蓀：ナカイモ、 イテウイモ、ヒライモ、セウカイモ、ナツイモ、 アイイモ、平タケイモ、佛掌薯。〔循縫郡の項に 「川イモ」の絵図と註書あり〕
58	VII	播 磨	播磨国網干領揖東郡揖西部産物帳	いも：とういも、さといも。
59	VII	備前・ 備中	備前国備中国之内領内産物帳	芋之部：大いも、小いも、唐のいも。薯 蓀之部： 自然生、はべいも、佛掌薯、いちやういも。何 首烏。甘 藷。
60	VIII	周 防	周防産物名寄	芋(里イモ)：サ、イモ、鶴ノ子、大イモ、葉イ モ、栗イモ、青イモ。蓮芋（白イモ、水イモ）。 赤芋（唐イモ、茎ヲボドウト云）。甘 藷（唐イ モ）。佛掌薯（江戸イモ）：シャウカイモ、ウヅ イモ、イテウイモ。黄獨(カシウ)：ツブラメ(犬 ムカコ)。薯 蓀（ナガイモ）。
61	VIII	長 門	長門産物名寄	芋(里芋、青芋)：サ、イモ、鶴ノコ、ハスイモ （群芳譜 白芋也）、栗イモ。赤芋（唐芋、紫 芋、茎ヲボドウト云）。佛掌薯（エトイモ）。 甘 藷。黄獨。薯 蓀（ナガイモ）。
62	XI	対 馬	産物覧帳 佐護郷	芋類：赤芋（ほうどう）、栗芋、ゑくり芋、真 芋、蓮芋、山芋、つくね芋、孝行芋。

資料 番号	産物帳集 成巻数	国 名	資 料 名	資 料 所 載 の イ モ 類
63	XI	対 馬	佐須郷産物覚	芋類：里いも、くりいも、赤いも（ぼうとう）、まいも、ゑぐり、はすいも、はいいも、山いも、つくねいも、孝行芋（さつまいも）。
64	XI	対 馬	産物覚豊崎郷	芋類：ま芋、栗芋、ほうとう、ゑくり、山の芋、つくいも、かうかう芋。
65	XI	対 馬	伊奈郷産物覚帳	野菜類：薯蓣 <sup>ヤマノイモ</sup> 、園菜類：甘藷 <sup>カンショ</sup> 、芋類：赤芋（ぼうとう）、栗芋、真芋、ゑぐり芋、蓮芋、琉球芋、孝行芋。
66	XI	対 馬	仁位郷産物帳	野菜類：山の芋、園菜類：つくねいも、はすいも、芋類：赤いも（ぼうとう）、くり芋、真いも、ゑぐりいも、孝行芋、たういも。
67	XI	対 馬	産物覚三根郷	芋類：山いも、孝行いも、赤いも（ぼうとう）、ていらいも、くりいも、つくねいも、ゑぐりいも、はすいも、白いも（真いも）。
68	XI	対 馬	豆酸郷産物覚帳	野菜類：山芋、芋類：しまいも、くりいも、まいも、あかいも（ぼうとう）、孝行芋（唐芋）。
69	XII	筑 前	筑前国産物帳	さといも（さゝいも）：つるのこ（ふとう、大小二種）、青いも、竹の根、しゃうかいも、はすいも（くりいも、はちいも）、白いも（はすいも、唐いも、てんぢくいも）、赤いも（黒からといふあり、赤いもの一種なり、又からくろともいふ）、八がしらいも、大いも（ほらいも）、山のいも、つくねいも（姫いも、くはんごいも）、宇治いも（つくねいもの一種）、唐いも（りうきういも、赤いも、前にしるす赤いも唐いもとは別也）、りうきういも（唐いもにあらず、別に一種あり）、けいも（あやまりて何首烏といふ）。
70	XI	肥 前	対州并田代産物記録 肥前国基肄養父領産物書付	芋：白いも、赤いも、はすいも、くりいも、山いも、つくねいも、ところ。
71	XIII	豊 後	豊後国之内熊本領産物帳	芋：はすいも、しまいも、赤いも、白いも、ハツかしら、里いも、小くろ、薺のこ、鉢いも、なごや、赤どう、薯蓣 <sup>ツクネイモ</sup> 、佛掌薯。
72	XIII	肥 後	肥後国之内熊本領産物帳	芋：里いも、薺の子、赤とう、白とう、はすいも、水いも、わきくろ、嶋いも、八つ口、めうすあん、姫いも、薯蓣 <sup>ツクネイモ</sup> 、佛掌薯 <sup>コンニャクイモ</sup> 、蒟蒻芋 <sup>リウキウイモ</sup> 、蕃薯。
73	XIII	肥 後	肥後国球麻郡米良山米良主膳領産物帳	さといも、やまのいも、かしう。
74	XIV	日 向	日向国諸縣郡産物帳	里芋：やつ口、わさ、つるのこ、薯蓣 <sup>ツクネイモ</sup> 、から芋、きり芋、ところ、蓮芋。



第2表 サトイモの品種分類

〔熊澤 (1967)<sup>23)</sup>より一部改変〕

品 種 群	代表品種	同種異名または類似品種	倍数性
数 芋	数 芋	数芋, 稲橋在来, 出雲塩治, とべ芋, 河ずいき, 河内芋, 紀州芋, 島芋, 美作芋, 京都2号, 栗芋, 太芋, 振草, 天王, 団子芋, 盆芋, 青芋, 小鳥, 奉化芋 (上海)	3x
沖縄青茎	沖縄青茎	沖縄青茎	2x
蓮 葉 芋	早生蓮葉芋	蓮葉芋, 蓮芋, 衣被, 石川早生, 水芋, 草深芋, 八幡芋, 静岡早生, 女早生, 文化芋, 弥市芋, 黄芋, 遠州, 笹倉, 白芋, 大土垂, 新郷土垂, 安行水芋, 蓮芋, 奉化種B (中国), 台湾白	3x
	中生蓮葉芋	日田1号	3x
石川早生	石川早生丸	石川早生, 甲州早生, 文久早生, 白茎京芋, 京芋13号, 鈴芋, 渋川, 襟掛芋, 愛媛早生, 丸子芋, 栗田, 深芋, 高座芋, 浅木, 日田早生, 熊野早生, 親責, 鶴の子, 八幡芋, 富岡早生	3x
	石川早生長	高座早生, 京早生3号, 在来晩生, 神玉, 東京早生, 早生1本	3x
土 垂	早生丸土垂	六月芋, 広島芋, 土垂, 早生芋, 寒残り, 大和, 井桁早生, 愛知早生, 白鳥, 早生丸, ジラ, 北京A114 (中国), ビヤナン社コマイカル (台湾), 早生真芋, 豊後	3x
	早生長土垂	蓮葉芋, 伝燈寺, 親責, 赤山芋, 大阪泉南種, 南京A (中国), シカミ芋 (台湾), 鉄砲芋, 吉野芋, 早生芋	3x
	中生丸土垂	早生土垂, 京都早生, 小姫, 六月芋, 白芋, 白早生芋, 白茎早生, 熊野, 中生土垂, 二宮18号, 文山群ラハウ社 (台湾)	3x
	中生長土垂	八重蔵, 土垂, 熊高郡パーラン社 (台湾), 北京204 (中国), 三州, 御厨, 坂本在来, 鶴の子, 高雄1号 (台湾), 上海13 (中国), 奉化種 (中国)	3x
	晩生長土垂	三保早生, 白芽早生, 白芽晩生, チャマサイ (台湾), ガオガン蕃社 (台湾), 台湾土垂 (台湾), 与五郎芋, 上座芋, 中生真芋, 円蕃, 群蕃, 南溪テキス社, 東勢郡雲山杭社 (台湾)	3x
黒 軸	黒 軸	黒軸, 早生赤芋, 赤桿, 赤ずいき, 朝鮮 (朝鮮)	3x
	水戸黒柄	水戸黒柄	3x
	鳥 播	鳥播 (台湾)	3x
	太湖芋	太湖蕃マバトワン社, 太湖郡北勢蕃マビルハ社 (台湾)	3x
赤 芽	赤 芽	赤芽, 鬼赤, 大野芋, 都芋, 沖縄芋	3x
	大吉	大吉 (セレベス)	3x
	白茎赤芽	赤芽系3	3x
	バンガミューロー	バンガミューロー (台湾)	3x
	黒茎赤芽	黒茎赤芽 (屋久島)	3x
薑 芋	薑 芋	薑芋	3x
檳榔芯	檳榔芯	檳榔芯 (台湾)	2x
	檳山芋	檳山群マスホワル社, 檳山群リキリキ社 (台湾)	2x
	紅檳榔芯	紅檳榔芯 (台湾)	3x
唐 芋	唐 芋	唐芋, 海老芋, 樋口, 猿芋, ぼどう芋, 麵芋, 高雄2号 (台湾), 山形田芋の芽条変異, 吉浜芋の芽条変異	2x
	真芋	真芋	2x
	女芋	白茎海老芋, 吉浜芋, 山形田芋	2x
	大頭	白頭, 大頭	2x
八つ頭	八つ頭	八つ頭	2x
	白茎八つ頭	白茎八つ頭	2x
みがしき	みがしき	みがしき	2x
	ロフト蕃	ロフト蕃 (台湾)	2x
溝 芋	溝 芋	水芋	2x
	赤口		2x
筍 芋	筍 芋	台湾芋	2x
蓮 芋	蓮 芋	蓮芋	2x

いる場合が多いが、第1表に示したように、資料によってその記載様式は必ずしも一定ではない。イモ類としてあげられた種類が何れの種に該当するかを判別するに当って、サトイモの記載を基準にして全資料のイモ類の記載様式を次のように6類型に大別した。

1) 総称名を「里いも」あるいは「芋(里イモ)」とし、サトイモのみ、あるいは、サトイモと他のイモ類とを区別して記載している資料: 1, 7, 8, 26, 55, 60, 61, 69, 73, 74.

2) 総称名を「芋」, 「いも」あるいは「芋之部」とし、サトイモのみ、あるいは、サトイモと他のイモ類とを区別して記載している資料: 2, 3, 5, 6, 25, 27, 28, 31, 32, 33, 34, 35, 36, 37, 38, 39, 40, 57, 58, 59, 71, 72.

3) 総称名を「芋」あるいは「いも」とし、サトイモと他のイモ類とを区別せずに記載している資料: 4, 9, 20, 21, 22, 23, 30, 41, 42, 43, 44, 45, 46, 47, 48, 49, 50, 51, 70.

4) 総称名を「芋」とし、サトイモと他のイモ類とを区別して記しているかどうか判断できない資料: 24, 37.

5) 総称名を「いもの類」あるいは「芋類」とし、一般に、サトイモと他のイモ類とを区別せずに記載している資料: 11, 12, 18, 19, 53, 62, 63, 64, 65, 66, 67, 68.

6) 総称名を欠き、サトイモと他のイモ類とを区別せずに記載している資料: 10, 13, 14, 15, 16, 17, 29, 52, 54, 56.

上記2)の総称名「芋」, 「いも」あるいは「芋之部」はサトイモを指し、3)の「芋」あるいは「いも」はサトイモを含むイモ類の総称名と考えられる。従って、3)から6)までの資料については、サトイモと他のイモ類とを区別するために、種類名の記載順序に注目した。3)の資料4, 9, 20, 21, 22, 23, 30, 41, 42, 43, 47, 51, 70, 4)の資料24, 37, 5)の資料11, 12, 18, 19, 62, 63, 64, 65, 66, 68, 及び6)の資料14, 17, 29, 73にはサトイモの種類名が先ず記され、続いて他のイモ類の種類名が列記されていると判断された。

しかしながら、これらの資料のうち、21の「ごりのいも」、22の「ころびいも」、23の「どんだらいも」、24の「かはゆら」、37の「大すくり」、42の「あふらきいも」及び43の「かしいも」は何れの種に属するものか判別することができなかった。なお、資料22の「ころびいも」と資料42の「あふらきいも」のそれぞれ「ころび」と「あふらき〔あぶらき、あぶらぎ〕」は、方言では、何れもトウダイグサ科のアブラギリ *Aleurites cordata* Muell. Arg.を指す<sup>67)</sup>。恐らく、「ころびいも」と「あふらきいも」は、その特性、例えば葉の形あるいは球根の形がアブラギリの何れかの部分に似ていることから名付けられたものと推測されるが、これらがイモ類の何れの種に該当するか不明である。

また、3)の資料44, 45, 46, 48, 49, 50, 5)の資料67, 及び6)の資料10, 13, 15, 16, 54, 56はサトイモの種類名と他のイモ類の種類名とが混記されている。これらの資料のうち、45の「かせいも」と「うずまき」、46の「ゑちこいも」、49の「てんとう」、50の「かしいも」及び67の「ていらいも」は何れの種に属するものか判別できなかった。

## 2. 資料所載のイモ類の種

資料に記載されているイモ類のなかで、判別できた種は、コンニャク *Amorphophallus konjac* K. Koch, ホド *Apios fortunei* Maxim., サトイモ *Colocasia esculenta* (L.) Schott, ハスイモ *C. gigantea* Hook. f., カシュウイモ *Dioscorea bulbifera* L., ジネンジョ *D. japonica* Thunb., ヤマイモ *D. opposita* Thunb., トコロ *D. tokoro* Makino, サツマイモ *Ipomoea batatas* Poir. 及びハス *Nelumbo nucifera* Gaertn.の10種であった。また、ヤマノイモ科植物の葉腋に着生する珠芽(むかご)を含めている資料もみられた。

しかしながら、『成形図説』に記載されていると述べられているダイショ *Dioscorea alata* L.<sup>13)26)</sup>については資料中に見出すことができなかった。

また、ジャガイモ *Solanum tuberosum* L.については、月川<sup>68)</sup>の「江戸時代の文献にみるジャガイモの呼称」に該当する種類名は資料中には認められなかった。ただ、資料46『尾張国産物春日井郡之内』に記された「えちこいも」は、サトイモやジネンジョ、ヤマイモ、サツマイモを記載した農書や本草書類にもみられなかったが、『日本植物方言集(草本類篇)』<sup>40)</sup>には岐阜県揖斐郡でジャガイモを、新潟県佐渡郡でナガイモを指すことが示されている。岐阜県揖斐郡と愛知県春日井郡とは距離的に近いことから、資料46の「えちこいも」はジャガイモではないかと推察される。しかし、越後で栽培されていたジャガイモが春日井郡へ導入されて「えちこいも」とよばれるようになったと仮定しても、越後へのジャガイモの伝播については「魚沼三郡は宝暦、天明(1751—88)の頃から栽培し、刈羽・古志郡これにつぎ天保の飢饉以後各郡にも広がった」<sup>68)</sup>と述べられていることから、1751—1788年以前に愛知県春日井郡に導入されたとは考え難い。

なお、ジャガイモの記載は、前報<sup>25)</sup>の資料では1804年に成立した『成形図説』が初めであり、松原<sup>29)</sup>は江戸時代の料理書には全く見当たらないと述べている。

サツマイモは、佐渡、加賀、越中、伊豆、和泉、紀伊、備前・備中、周防、長門、対馬、筑前、肥後及び日向の計14か国の資料に記載され、「りゅうきゅういも」、「さつまいも」、「あかいも」、「とういも」、「からいも」、「こうこういも」とよばれ、漢字では「甘薯」、「甘藷」、「蕃藷」、「琉球芋」、「薩摩芋」、「紫藷」、「唐芋」、「孝行芋」と表されている。

ジネンジョあるいはヤマイモは66編の資料に記載されていて、総称名及び同種類異名を含む種類名数は約45に達する。しかし、総称名やそれぞれの種類名は統一した名称で記されていない。その例をサトイモとジネンジョ・ヤマイモとを明確に区別して記載している18編の資料についてあげれば、以下になる。

1) ジネンジョとヤマイモ3群(長形、扁形、塊形)、あるいは、ヤマイモ3群を「山芋」と総称している資料：5, 7, 「山薯蕷」と総称している資料：27, 「薯蕷」と総称している資料：57。

2) ジネンジョ・ヤマイモ3群とカシュウイモ、あるいは、ヤマイモ3群とカシュウイモを「山芋」と総称している資料：8。

3) ジネンジョとヤマイモ3群、あるいは、ジネンジョとヤマイモの扁形・塊形群を「薯蕷」と総称している資料：55, 59。

4) ジネンジョとヤマイモの長形群を「なかいも」と総称している資料：1, 「薯蕷」と総称している資料：2。

5) ジネンジョとヤマイモの長形群を「薯蕷」と総称していると推測される資料：25, 28, 71, 72, 「長いも」と総称していると推測される資料：26, 31, 「薯蕷(ナガイモ)」と総称していると推測される資料：60, 61。

6) ヤマイモの扁形群と塊形群を「といも」と総称している資料：1, 「山のいも(つくねいも)」と総称している資料：25, 26, 「佛掌薯」と総称している資料：31, 60, 61。

7) ヤマイモ3群を「つくね芋」と総称していると推測される資料：35。

8) ヤマイモの扁形群あるいは塊形群の1品種を「つくね芋」とよんでいる資料：1, 5, 57, 59。

### 3. 異種間に共通する種類名について

#### (1) つるのこいも

資料1には「ながいも」の1種類として「つるのこいも」別名「つるいも」があげられている。前報<sup>35)</sup>の資料のなかでヤマノイモ科植物として「つるのこいも」あるいは「つるいも」を記載している資料は『成形図説』だけである。これには巻二十二の目録及び絵図題に「蔓芋」と記されて「ツクネイモ」の振仮名が付けられている。また、「<sup>ツクネイモ</sup>捧芋」の説明に『広志』の「蔓芋」が引用されている。

資料13, 14, 17, 27, 28, 57, 60, 61, 69, 71及び74には「靄ノ子いも」や「つるのこ」など「つるのこいも」に近い種類名が記されているが、これらはすべてサトイモの品種あるいは品種群と判断される。

#### (2) といも、とういも及びとうのいも

盛岡領の『御領分産物』(資料1)には「といも」に属するものとして「つくね」、「ぼろいも」及び「へらいも」があげられているので、この「といも」はヤマイモの扁形・塊形群の総称名と判断される。『本草綱目啓蒙』<sup>46)</sup>には「其〔芋の〕形 肥厚ニ<sup>つくねいも</sup> 人形ノ如キ者ヲダイコクイモト呼ブ 一名トイモ 仙台」と述べ、『日本植物方言集』<sup>40)</sup>には盛岡市でツクネイモがトイモと呼ばれていることが記されている。

資料4では「つくいも」について「とういも共申候」と述べられている。『物類称呼』<sup>23)</sup>と『成形図説』<sup>50)</sup>には「つくいも」について、「ツクネイモ」を東国では「つくいも」とよぶと述べ、関東地方で成立した農書<sup>6)32)35)47)</sup>にも「つく芋」や「<sup>つくねいも</sup>佛掌薯」がみられる。従って、資料4の「つくいも」別名「とういも」はヤマイモの扁形・塊形群に属するものと判断される。

また、資料15には「しゃうかいも・佛掌薯」の別名として「とうのいも」「つくねいも」が、資料16には「唐のいも・佛掌薯」の別名として「つくねいも」が記されていることから、これら2編の資料のそれぞれ「とうのいも」、「唐のいも」はヤマイモの扁形群と塊形群を合わせた総称名、あるいはこれらのうちの何れか一つの群の総称名と判断される。

資料60の「<sup>リウキウイモ</sup>甘藷」別名「唐イモ」、資料68の「孝行芋」別名「唐芋」及び資料69の「唐いも」別名「りうきういも」「赤いも」はいずれもサツマイモと判断される。資料66の「たういも」は、「芋類」として「赤芋(ほうとう)」、「くり芋」、「真芋」、「<sup>あぐりいも</sup>あぐりいも」、「孝行芋」を列記した最後にあげられている。これらのうち、「あぐりいも」までがサトイモで、「赤芋(ほうとう)」は現存の唐芋群に属するものと判断されるので、この「たういも」はサトイモの品種あるいは品種群には当たらないようである。資料69では「唐いも」について「りうきういも又赤いもともいふ」と述べ、この「唐いも」別名「りうきういも」「赤いも」とは別に「りうきういも」を記している。つまり、サツマイモに2種類があることを示している。従って、資料66でも「孝行芋」の他に「たういも」とよばれるサツマイモが存在していたことを示しているのではないかと推察される。

資料によって呼称が多少異なるが、記載様式や記載順序からサトイモの品種あるいは品種群と判断される「とうのいも」が、後述のように、42編の資料にみられた。しかしながら、資料11の「たういも」及び資料54の「とをのいも」は何れの種に属するものか判別することができない。

#### (3) はいも

『御領分産物』(資料1)の「いものこ」は「葉いも共 からとり共 [いう]」と記されている。『日本植物方言集』<sup>40)</sup>によれば、サトイモを岩手県盛岡市・二戸郡では「イモノコ」とよび、二戸郡ではまた「ハイモ」ともよんでいることから、資料1の「葉いも」はサトイモと判断さ

れる。また、資料60の「葉イモ」も「芋（里イモ）」に属するように記されている。

資料12の「葉いも」及び資料17の「はいも・薯蕷一〔薯蕷のなかの1種類〕」は、それぞれ「葉山のいものことく少し広ク 味悪し 秋の彼岸頃又春ニ至出来 此を掘取申候」、「葉丸ク薄赤クつるになり いも長ク細ク 九月頃より翌年四五月頃までニ出来」と註記されている。また、資料17の「はいも・薯蕷一」は、「はいも」が「山のいも・薯蕷」に属していることを指し、「つくねいも・佛掌薯」とは別に記されている。従って、これら両資料の「葉いも」及び「はいも・薯蕷一」はジネンジョあるいはヤマイモ長形群の1種類を指していると判断される。

資料15、16の「はいも・芋苗」及び資料19の「葉いも・芋苗」についてはその特性が記されていない。また、農書や本草書類、あるいは『日本植物方言集』<sup>40)</sup>や『日本方言大辞典』<sup>67)</sup>にも「はいも」がヤマノイモ科植物を指す記述はない。しかし、資料12—19は金沢領で編纂された『郡方産物帳』であることから、資料15、16及び19の「はいも」と「葉いも」は資料12、17の「葉いも」及び「はいも・薯蕷一」と同じジネンジョあるいはヤマイモ長形群の1種類ではないかと考えられる。

一方、資料12、17ではそれぞれ「葉いも」及び「はいも・薯蕷一」と記されているのに対し、資料15、16では「はいも・芋苗」、19では「葉いも・芋苗」と「はいも」「葉いも」に漢字の「芋苗」が付記されているので、これら3編の資料の「葉芋」は、資料12、17の「葉芋」とは異なる種類ではないかとも推察される。あるいはまた、「芋苗」を芋のシュートと想定すれば、「芋苗」はサトイモの軟化したシュート、つまり、一般に芽芋あるいは根芋とよばれているものではないかとも考えられる。なお、『日本方言大辞典』<sup>67)</sup>には築瀬 栄著『教育適用南部方言集』

(1905年)から採録した「はいも・葉芋」が佐渡では「里芋の芽生え、根芋」を指すと記されているが、資料15、16及び19の「芋苗」が芽芋あるいは根芋を表すかどうかについては不明である。

#### (4) ところ及びところいも

『陸奥国田村郡三春秋田信濃守御領地草木鳥獸諸色集書』（資料4）には「芋〔イモ類の総称〕」のなかに「ところいも」が、「草類」のなかに「ところ」が記されている。また、常陸国の『御領内産物留』（資料5）には「山芋」の1種類として「トコロイモ」があげられている。前報<sup>35)</sup>の農書や本草書類にはジネンジョやヤマイモを「ところいも」とよぶ記述は全く見られなかったが、『日本方言大辞典』<sup>67)</sup>によれば農林省統計調査部発行の『農作物の地方名』（1951年）から採録された「つくねいも・佛掌薯」が、千葉県の一部で「ところいも」とよばれている。これらのことを考え合わせれば、資料4及び5のそれぞれ「ところいも」と「トコロイモ」はトコロではなく、ヤマイモと判断される。

#### (5) しょうかいも及びはしかみいも

資料15及び60には「しょうかいも」がヤマイモの扁形群ないしは塊形群として、また、資料57では「セウカイモ」がジネンジョあるいはヤマイモの1種類として記されている。

一方、資料69では「さといも（さゝいも）」の1種類として「しょうかいも」があげられている。この資料では「しょうかいも」は、草姿や球根の形態が類似している「八がしらいも」とは区別して記載されていることから、現存品種の「薑芋」と判断され、前報<sup>35)</sup>においてもそのように取扱った。

ショウガは『新撰字鏡』<sup>57)</sup>や『和名抄』<sup>30)</sup>では「クレノハジカミ」とよばれ、「室町時代からショウガと呼んだ」<sup>2)</sup>とあり、『増補下学集』<sup>71)</sup>には「生薑」に「シャウカ」と振仮名が付けられ、『本朝食鑑』<sup>12)</sup>には「志也字加と訓む。波之加美ともいう」と記されている。

「しょうがいも」あるいは「はしかみいも」に関する記載は、前報<sup>35)</sup>の資料のサトイモの部に

は全く認められなかったが、『大和本草』<sup>21)</sup>、『本草図譜』<sup>19)</sup>、『古今要覧稿』<sup>73)</sup>には「<sup>ツクネイモ</sup>佛掌薯」の説明に、また、『和漢三才図会』<sup>65)</sup>には「薯蕷」の説明に『本草綱目』や『本草図経』から引用した「如薑芋之類」がみられ、この「薑芋」が「しょうがいも」あるいは「はしかみいも」と訓まれたものと推察される。また、『古今要覧稿』<sup>73)</sup>にはヤマイモの扁形・塊形群を表す言葉として「<sup>ツクネイモ</sup>薑蕷」をあげている。なお、「つくねいも」は山口県玖珂郡・都濃郡で「ショーガイモ」、新潟県で「ハジカミイモ」とよばれている<sup>40)</sup>。

資料55には「<sup>さといも</sup>里芋」の1種類として「はしかみ芋」があげられているが、現存品種の「薑芋」と判断した資料69の「しょうかいも」と同一かどうかは不明である。

『尾張国産物 春日井郡、丹羽郡、葉栗郡』(資料46, 47, 48)には総称名「いも」のなかに「はしかみいも」が記されている。資料47には「とうのいも」、「ゑこいも」、「山のいも」、「はしかみいも」、「ていも」、「かねてこいも」の順に記されているので、「ゑこいも」までがサトイモ、「山のいも」以下がジネンジョとヤマイモで、この「はしかみいも」はジネンジョあるいはヤマイモではないかと推察される。しかし、資料46及び48ではサトイモの種類と、ジネンジョやヤマイモの種類とが混記されているので、『尾張国産物』の「はしかみいも」がサトイモの種類か、ジネンジョあるいはヤマイモの種類か不明である。

#### (6) 姫いも

資料69には「つくねいも」を「姫いも又くはんごいも〔クワの実のような形に由来する〕ともいう」とあり、筑前国ではヤマイモの扁形群あるいは塊形群の1種類を「姫いも」とよんでいたことがうかがわれる。前報<sup>35)</sup>の資料には「姫いも」はみられなかったが、『実験蔬菜園芸』には筑前国における「佛掌薯」の地方名として「姫いも」があげられ<sup>53)</sup>、鹿児島県ではトコロを「姫いも」とよんでいる<sup>67)</sup>。

一方、『肥後国之内熊本領産物帳』(資料72)には「芋〔サトイモ〕」の1種類として「姫いも」があげられている。これが現存の品種あるいは品種群の何れに該当するか不明である。

### 4. 資料所載のサトイモの種類と現存品種・品種群との関係

第1表にあげたイモ類の種類名のなかから、前述のように、サトイモの種類かどうか判別できなかったものを除いて、サトイモの同一種類名を抽出し、「調査方法」で述べた基準によってそれらが現存品種あるいは品種群の何れに該当するかについて以下のように検討し、その結果を第3表にあげた。

#### (1) 藪芋、嶋芋、花咲芋、島芋、青ずいき及び青芋

前報<sup>35)</sup>では、「ゑごいも」、「いごいも」及び「よごいも」の言葉は、「いもかしら大きなはゑごからず」(『百姓伝記])、「から生にていごみなし」(『耕作仕様書])あるいは「芋よごく成て悪し」(『私家農業談])などの記述から、「えぐいも」の転訛と考え、「藪芋」として取扱った。また、「藪芋」と記されている場合、藪芋群あるいはこの群に属する品種以外の群・品種に該当することはないと判断し、7編の資料に記された「藪芋」をすべて藪芋群に属するものとした。

本資料においても、「いごいも」、「ゑぐり」、「ゑぐりいも」、「ゑご」、「ゑごいも」、「ゑぐり」、「ゑぐりいも」あるいは「よこ芋」など「えぐいも」に近い音の種類が記載されている。これらはすべて「えぐいも」の転訛と考え、「藪芋」として取扱った。また、本報でも、前報<sup>35)</sup>に準じて資料に記載されている「藪芋」はすべて藪芋群、あるいは藪芋群に属する品種とした。なお、その際、ジネンジョを和州で「エグイモ」<sup>20)</sup>、クワイを秋田県の一部で「いご」あるいは「えご」<sup>67)</sup>、クログワイを東国で「えご」<sup>64)</sup>とよんでいることも考慮した。

第2表のように、藪芋群には「藪芋」の他に、同品種異名または類似品種として「島芋」や「青芋」な

どが属している。本資料では「嶋芋」あるいは「藪芋」が記載されている場合、資料25及び26を除いて、これらのうちの何れか一方の種類しか記載されていない。従って、「嶋芋」もすべて藪芋群に属するものと判断した。

伊豆国田方郡の産物帳である資料26には「嶋いも」の絵図が付けられていて、その註書に「葉の形ち如図 平生の里芋同様の匂に出来 から青く子〔子芋〕はゑこいもにて くき〔葉柄〕をおもに糧に仕候」と記されている。この地方では藪芋群のなかに葉柄を主として食用とする品種があり、「えこいも」と区別して、それを「嶋いも」とよんでいたものと思われる。資料25は、資料26と同様に、伊豆国の産物帳であるので、この資料の「しまいも」も藪芋群に属するものと判断される。

藪芋群に属する品種は自然条件下で最も開花し易い<sup>25)34)</sup>ので、「花咲」<sup>52)</sup>とか「花いも」<sup>6)</sup>とよばれていて、本資料の7及び8にもそれぞれ「はなつき ゑごりいも共申候」、「ゑごりいも 此別名花さき」と述べられている。従って、註記を欠く資料6の「花さきいも」も藪芋群に属するものと判断される。

「畠芋」について、『成形図説』<sup>56)</sup>には「里芋」<sup>サトイモ</sup>とともに「山芋」<sup>ムカ</sup>に対へ云へり」と記されている。つまり、「畠芋」あるいは「里芋」はサトイモの総称名であると述べている。一方、『本草綱目啓蒙』<sup>45)</sup>には「青芋ハサトイモ一名ハタケイモ エグイモ ハタイモ 仙台」、「苗小メ茎青ク 味蕨食ベカラズ 根ニ子多シ」と述べられ、『本草図譜』<sup>19)</sup>には「青芋 集解 さといも はたけいも あをから 江戸」、「形状紫芋に似て青色 茎高さ 三四尺 子多し稍蕨ミあり 熟し食すれハ良し」と述べられている。これら2編のなかの「はたけいも」は品種を表し、前報<sup>35)</sup>では藪芋群に属するものと判断した。

資料4には「畑いも」の他に「からとりいも 紫白」と「ゑごりいも」があげられ、「畑いも」は「葉もたべ申候」と述べられているが、これが藪芋群に属するかどうか不明である。資料12には「畠いも」の他に「たうのいも」と「はすいも」があげられ、「畠いも」には漢字の「青芋」が付記されているので、この「畠いも」は藪芋群に属するものと判断される。

資料60及び69には「青芋」について註記はない。これらが何れの品種・品種群に該当するか判別できない。

## (2) 里芋

わが国でサトイモ属植物を総称して「サトイモ」とよぶようになった時期は1631年以降と推定され<sup>35)</sup>、その後、前述のように、「サトイモ」は総称名としてだけでなく、主として子芋を食用とする品種群、あるいは品種についてもよばれるようになり、このような取扱いは第二次大戦頃まで続いた。

本項で取扱った「里芋」は総称名としての「里芋」ではなく、品種あるいは品種群として記載されているものだけに限った。資料18の「里芋」は「いこいも・青芋或ハ里いも」としてあげられているので、前述のように藪芋群に属するものと判断した。しかし、その他の資料の「里芋」は何れの品種・品種群に該当するか判別できない。

## (3) 青から

「青から」は資料5及び34にあげられている。「青から」の名称は、杉山<sup>58)</sup>も述べているように、濃緑色の葉柄に因むものと思われる。わが国のサトイモのなかで外観的に葉柄が濃緑色の品種は藪芋群と筍芋群に属するものである。筍芋群の品種は「筍芋」のみで、これは明治時代以後に導入されている<sup>26)28)</sup>ので、江戸時代に濃緑色の葉柄をもつ品種群は藪芋群のみと考えられる。

前報<sup>35)</sup>では、「青から」は『百姓伝記』と『本草図譜』に記載されていて、藪芋群に属するものと判断した<sup>35)</sup>。従って、本資料の5及び34の「青から」を藪芋群に属するものと判断しても誤

第3表 資料所載のサトイモの種類と現存品種・品種群との関係

資料 番号	国	名	資 料 名	現 存 品 種 群					未 判 別 種 類
				歌 芋	運 葉 芋	石川早生	土 垂	唐 芋	
1	陸	中	御領分産物						いものこ(葉いも、からとり)=サトイモ総 称名
2	羽	前	羽州庄内領産物帳						白いも、赤いも、はすいも
3	羽	前	米澤産物集						赤芋(葉いも)
4	岩	代	薩美田村郡三春秋田信濃守 領地草木鳥獸諸色集書						煙いも
5	常	陸	御領内産物留	エグイモ、青カラ	クリイモ				早イモ、黒イモ、白イモ、キヤウイモ、 ドタイモ、スズカネ
6	下	野	下野国河内郡宇都宮領高谷林 新田村産物書上ケ帳	花さきいも					白黒いも
7	下	野	下野国宇都宮領岡本郡寄拾巻ケ村 産物書上ケ帳	はなつき(えごり いも)	またくろいも(く りいも、八つかしら)				しろいも(しんずい)、くろいも
8	下	野	下野国河内郡羽生田村ほか十二カ 村書上げ(欠額)	えごりいも(花さ き)	また黒				白いも、黒いも、とうのいも
9	下	野	丹羽正仁様より被仰出候品々書上帳	えごり					黒いも、八つ頭 白芋(タウノイモ)
10	佐	渡	佐州産物志	えごいも					黒いも
11	越	後	蒲原郡小川庄石間重滝谷村産物 郡方産物帳	島いも・青芋					はすいも・白芋
12	加	賀	郡方産物帳	えごいも・青芋					鱧ノ子いも・芋卵、はすいも・白芋
13	加	賀	郡方産物帳	えごいも・青芋					つるのこいも・芋卵
14	加	賀	郡方産物帳	えごいも・青芋					あかいも・紫芋
15	能	登	郡方産物帳	いこいも・青芋					はすいも・白芋
16	能	登	郡方産物帳	島いも・青芋(い ごいも)					あかいも・紫芋
17	越	中	郡方産物帳	えごいも・青芋 (青ずいき)					はすいも・紫芋
18	越	中	郡方産物帳	いこいも・青芋(里 いも)					こいも・芋卵
19	越	中	郡方産物帳	いこいも・青芋					とうのいも、まいも
20	越	前	越前国福井領産物	えぐいも					まいも、黒いも
21	越	前	越前国之内御領知産物	えぐいも					さといも、とうのいも
22	信	濃	信濃国伊那郡京摩郡高遠領産物帳						



資料 番号	国	名	資 料 名	現 存 品 種 群							未 判 別 種 類	
				菰 芋	蓮 葉 芋	石川早生	土 産	薑 芋	唐 芋	八 つ 頭		溝 芋
23	信	濃	信濃国筑摩郡之内産物	ゑこいも								里いも、とうのいも、まいも
24	駿	河	駿河国駿東郡御厨村々穀類果実山 菜島嶽その他書き上げ	しまいも								こいも、はすいも
25	伊	豆	伊豆国君沢郡田方郡加茂郡産物并 絵図帳 君澤郡	しまいも、ゑぐい も								黒いも、とうのいも、あきいも、小いも、 白から
26	伊	豆	伊豆国君沢郡田方郡加茂郡産物并 絵図帳 田方郡	嶋いも								とうのいも、小いも、白から、女郎いも、 はすいも
27	伊	豆	伊豆国君沢郡田方郡加茂郡産物并 絵図帳 賀茂郡	嶋いも								白から、つるのこ、とうの芋
28	遠	江	遠江国豊河郡佐野郡榛原郡城東郡 山名郡島知郡豊田郡産物帳	しまいも								つるのこ、大いも、八つかしら、青がしら、 赤がしら、黒がしら、はす芋、とうのいも
29	三	河	尾張縣家老修辺半蔵在所参河国加 茂郡寺領産物									里いも
30	飛	驒	飛州志	エゴイモ								地芋、トウノイモ
31	美	濃	美濃国之内産物 羽栗郡之内	ゑこいも							蓮芋	とのいも、まいも
32	美	濃	美濃国之内産物 各務郡之内	ゑこいも								とのいも、まいも
33	美	濃	美濃国之内産物 石津郡之内	ゑこいも、書から								黒から、白から、おやせつき、とうのいも
34	美	濃	美濃国之内産物 安八郡之内	ゑこ								白から、とうのいも、黒、赤から、まいも
35	美	濃	美濃国之内産物 加茂郡之内	ゑこ								とうのいも、から黒
36	美	濃	美濃国之内産物 武儀郡之内	ゑこいも								まいも、とうのいも、つくし、からしろ
37	美	濃	美濃国之内産物 不破郡之内	ゑこ								まいも、とうのいも
38	美	濃	美濃国之内産物 多芸郡之内	ゑこ								とうのいも、まいも
39	美	濃	美濃国之内産物 本巢郡之内	よこ芋							蓮芋	まいも
40	美	濃	美濃国之内産物 中嶋郡之内	ゑこいも								唐のいも、まいも
41	美	濃	美濃国之内産物 厚見郡之内	ゑこいも								まいも、唐のいも
42	美	濃	美濃国之内産物 可児郡之内	ゑこいも								とうのいも、まいも
43	尾	張	尾張縣家老成瀬寺人正在所 尾張丹羽郡大山産物	ゑこいも								たうの芋、まいも
44	尾	張	尾張国産物 愛知郡之内	ゑこいも								さといも、はすいも、とふのいも
45	尾	張	尾張国産物 知多郡之内	ゑこいも								さといも
46	尾	張	尾張国産物 春日井郡之内	ゑこいも								さといも、とうのいも、まいも
47	尾	張	尾張国産物 丹羽郡之内	ゑこいも								とうのいも
48	尾	張	尾張国産物 葉栗郡之内	ゑこいも								里いも、とうのいも、まいも、くりいも
49	尾	張	尾張国産物 中嶋郡之内	ゑぐいも								里いも、まいも、とうのいも、くろから、 はすいも、おやせつき、からくろ

資料 番号	国 名	資 料 名	現 存 品 種 群					未 判 別 種 類	
			菰 芋	蓮 葉 芋	土 垂 蔓 芋	唐 芋	八 つ 頭 芋	溝 芋	蓮 芋
50	尾張	尾張国産物 海東郡之内	あこいも						里いも、まいも、はすいも、おやせつき、しろから
51	尾張	尾張産物志 海西郡之内	あこいも						とのいも、しろから、はすいも、まいも、おやせつき
52	伊賀	伊賀国産物図			親せめ				里芋 (青いも)
53	近江	郡方産物帳江州御知行所今津弘川海津之内中村町産物帳						はすいも	さといも
54	和泉	和泉物産							都芋、栗芋、はしかみ芋、赤芋、はす芋
55	紀伊	紀州産物帳							里芋
56	肥前	肥前産物絵図注書							サトイモ、白イモ、マイモ、トウノイモ、小イモ、ツルノコ
57	出雲	出雲国産物名疏	エカイモ						とういも、さといも
58	播磨	播磨国綱干領振東郡揖保郡産物帳							大いも、小いも、唐のいも
59	備前・備中	備前国備中国之内領内産物帳							サトイモ、唐ノ子、太イモ、葉イモ、青イモ
60	周防	周防産物名寄	栗イモ			赤芋 (唐イモ)		ハスイモ (白芋)	サトイモ、唐ノコ
61	長門	長門産物名寄	栗イモ			赤芋 (唐芋)		蓮芋	真芋
62	対馬	産物實帳佐渡郷	あぐり芋			赤芋 (ほうとう)		はすいも	里いも、まいも
63	対馬	佐賀縣産物覽	あぐり			赤いも (ほうとう)		はすいも	ま芋
64	対馬	産物實帳豊前郷	あぐり			ほうとう		蓮芋	真芋
65	対馬	伊奈縣産物覽帳	あぐり芋			赤芋 (ほうとう)		はすいも	真いも
66	対馬	仁位郷産物帳	あぐりいも			赤いも (ほうとう)		はすいも	白いも (真いも)
67	対馬	産物實三根郷	あぐりいも			赤いも (ほうとう)			まいも
68	対馬	豆蔵郷産物實帳	しまいも			あかいも (ほうとう)			
69	筑前	筑前国産物帳				赤いも (黒から、八がしろからくろ)、大いも (ほらいも)		白芋 (はすいも、唐いも、てんぢくいも)	つるのこ (ふとう、大小二種)、青いも、竹の根
70	肥前	対州井田代産物記録、肥前国基肆養父郷産物書付				しゃうか			白いも、赤いも、はすいも、くりいも
71	豊後	豊後国之内熊本領産物帳	しまいも			いも			はすいも、赤いも、白いも、ハツかしら、里芋、小くろ、露のこ、鉢いも、なごや、赤どう
72	肥後	肥後国之内熊本領産物帳				白とう		水いも	里いも、露の子、赤とう、わきくろ、めうすあん、姪いも
73	肥後	肥後国球麻郡米良山主膳領産物帳							さといも
74	日向	日向国諸縣郡産物帳					やつ口		わさ、つるのこ

りではないように思われる。

#### (4) 唐芋, ぼうとう, 赤芋, 紫芋, 赤ずいき及びとうずいき

前報<sup>35)</sup>では、「唐芋」別名「白芋」(『大和本草』『菜譜』)、「蓮芋」別名「<sup>タウノイモ</sup>臺乃芋」「<sup>ハスイモ</sup>白芋」(『成形図説』)及び「とう芋」(『粒々辛苦録』)を「蓮芋」と判断した。一方、「とうのいも」(『百姓伝記』)、「唐ノ芋」別名「女芋」(『物類称呼』)、「紫芋」別名「<sup>ハスイモ</sup>トウノイモ」「<sup>ハスイモ</sup>ヲンナイモ」「クロドウ」「ポドウ」(『本草綱目啓蒙』)、「とう芋」(『北越新発田領農業年中行事』)、「紫芋」別名「あかいも」「とうのいも」「あかから」(『本草図譜』)、「とうの芋」別名「赤から」(『耕作仕様書』)及び「<sup>タウノイモ</sup>タウノイモ」別名「紫芋」(『草木図説』)は唐芋群に属するものと判断した。

このように、資料中に「唐芋」と記されている場合、必ずしも現存の「唐芋」あるいは唐芋群に属する品種に該当するとは限らない。そこで、本報では唐芋群に属する品種と判断する基準として、「唐芋」を記載した資料に「蓮芋」と「白芋」が別記されている場合、あるいは、「唐芋」別名「紫芋」, 「唐芋」別名「赤芋」, 「唐芋」別名「赤ずいき」と記されている場合に限った。このような基準によって判別した結果、「唐芋」を記載した42編の資料中、唐芋群に属する品種と判断した種類名を記載した資料は僅かに10編のみであった。

資料60及び61には「赤芋」について、それぞれ「唐イモ 茎ヲポドウト云」, 「唐芋共 須知紫芋 茎ヲポドウト云」と説明されている。これらの「赤芋」別名「唐芋」は上述の判別基準によって唐芋群に属するものと判断した。対馬国の産物帳である資料61—68には、資料64を除いて、「赤芋 ぼうとう共云」と記され、資料64には「ぼうとう」とだけ記されている。この「ぼうとう」あるいは「ほうとう」は、資料60及び61に記されているように、唐芋群に属する品種の葉柄を指してよんでいたのが、品種そのものを指すようになったものと考えられる。『本草綱目啓蒙』<sup>45)</sup>には「紫芋ハトウノイモ 一名ヲンナイモ遠州 アカイモ筑前 クロドウ豫州 ポドウ防州」と述べられている。現在、長崎県平戸市で栽培されている「ポドウ」は唐芋群の「白頭」によく似た品種である。これらのことを総合して考えると、資料61—68の「ぼうとう」は唐芋群に属するものと判断される。

『筑前国産物帳』(資料69)には「赤いも」について「又黒からといふあり 赤いもの一種なり 又からくろともいふ」と記されている。この「赤いも」は、品種群を表しているが、上述のように『本草綱目啓蒙』<sup>45)</sup>に唐芋群に属するものと判断される「紫芋」別名「トウノイモ」が筑前では「アカイモ」とよぶと述べられていることから、唐芋群と判断される。しかしながら、資料2, 15, 55, 70及び71の「赤芋」は何れの品種・品種群に該当するか判別できない。

資料17には「はすいも・紫芋」をあげ、「葉くき共色青ク 子丸ク色薄赤ク 九月頃出来」と述べられている。「はすいも」や「子丸ク」の言葉からは蓮葉芋群の品種と考えられるが、「紫芋」や「〔子芋の色〕薄赤ク」の言葉からは赤芋群あるいは唐芋群とも推測され、これらが何れの品種群に該当するか判別できない。

#### (5) 大芋及び法螺芋

前報<sup>35)</sup>では、「大芋」別名「法螺芋」は『筑前国統風土記』, 『大和本草』及び『菜譜』にあげられていて、現存品種を分類した第2表には記載がないが、「大芋」品種として唐芋群に属すると述べた。

「大いも ほらいもともいふ 上座郡に産す 同郡須川村に多し 根甚大なり」と記している『筑前国産物帳』(資料69)は編纂された地域、時代ともに上述の3編の資料とほぼ同じであるので、この「大いも」別名「ほらいも」は唐芋群に属する「大芋」とであると判断される。

また、資料59及び60も筑前国に比較的に近いそれぞれ備前・備中国と周防国の産物帳であるが、これらに記されている「大芋」が資料69の「大いも」別名「ほらいも」と同一品種かどうか

か不明である。特に、資料59には「芋〔サトイモ〕之部」として「大いも」、「小いも」及び「唐のいも」の3種類が記されていて、この「小いも」は小さい芋を着生する品種あるいはそのような性質を具えた多くの品種の総称名で、「大いも」は大きい芋を着生する品種あるいは総称名とも考えられる。

#### (6) 柄取芋、葉いも及びいものこ

前報<sup>35)</sup>の資料には「からとりいも」あるいは「からとり」については全く記載がみられなかったが、本資料では陸中国、羽前国及び岩代国の資料（それぞれ資料1, 2, 4）に記されている。

資料1では「なかいも」や「といも」を記した後にそれぞれに品種名あるいは系統名があげられているので、「なかいも」や「といも」はヤマイモの品種・系統群名を表している。一方、「いものこ」別名「葉いも」「からとり」の後には品種名あるいは系統名が記されていないので、この「いものこ」別名「葉いも」「からとり」は、サトイモの品種名、品種群名あるいは総称名のうちの何れか判別し難いが、前述のように、盛岡市や二戸郡ではサトイモを「イモノコ」あるいは「ハイモ」とよんでいるので、サトイモの総称名と推測される。

資料2『羽州庄内領産物帳』の「紫芋」別名「たうのいも」「からとり」は、前述のように、唐芋群に属するものと判断した。この産物帳が編纂された山形県庄内地方では、現在、唐芋群に属する「柄取芋」が湛水状態で栽培されている<sup>2)</sup>。従って、資料2の「紫芋」別名「たうのいも」「からとり」は「柄取芋」に該当すると判断しても誤りではないように思われる。なお、第2表の唐芋群に「柄取芋」はあげられていない。この表では唐芋群の代表品種として「唐芋」、「真芋」、「女芋」及び「大頭」が記され、「唐芋」と「女芋」には同品種異名または類似品種としてそれぞれ「山形田芋の芽条変異」、「山形田芋」があげられているが、青葉<sup>2)</sup>は「柄取芋」に赤茎系と青茎系の2系統があることを紹介し、「青茎系は赤茎系から突然変異で生まれたものとみられ、山形田芋とも呼ばれている」と述べているので、第2表に「唐芋」の同品種異名または類似品種としてあげられている「山形田芋の芽条変異」は、「柄取芋」に訂正されるべきであろう。

資料4の「からとりいも 紫白」の「紫白」は葉柄の色がそれぞれ「紫」と「白〔緑〕」の2品種あるいは2系統が存在していたことを物語っているようである。「柄取芋」は最上川やや南を境界にして青茎系と赤茎系の2系統が栽培されている<sup>1)</sup>。羽前国と岩代国は隣接していることから、資料4の「からとりいも 紫白」は唐芋群の「柄取芋」の赤茎系と青茎系と判断される。

#### (7) 白頭

「白とう」は『肥後国之内熊本領産物帳』（資料72）にだけあげられている。第2表の唐芋群の「白頭」は「しろどう」と訓む<sup>28)</sup>。この「白頭」は熊本県阿蘇郡や大分県日田郡の山間地で栽培され、葉柄や親芋が食用となっている。『日本の食生活全集』のなかでは『聞き書 熊本の食事』の「阿蘇の食」<sup>17)</sup>にのみ「白ど」があげられ、「白どは〔葉柄の〕皮をむいて、酢のものや味噌汁の実に入れたりして利用する」と述べられている。恐らく、「白頭」、「白とう」あるいは「白ど」とよばれる品種の分布範囲は熊本、大分の両県に限られているものと考えられ、資料72の「白とう」は唐芋群の「白頭」と判断される。

#### (8) 黒から、から黒及び黒芋

前述のように、唐芋群に属すると判断した資料69の「黒から」は「からくろ」ともよばれている。一方、資料49の「くろから」は「からくろ」とは別に記されている。従ってこれらは互に異なる品種と推測されるが、何れの品種群に属するか不明である。また、資料33の「黒から」及び資料35の「からくろ」も判別できない。

わが国のサトイモには芋の外観が黒色、紫色あるいは紫赤色の品種は存在しないが、葉柄にシアニジン系色素を生じて紫黒色、紫赤色あるいは淡赤色を呈する品種が存在する。従って、資料7、8、9及び25の「黒芋」の名称の由来は葉柄の色に基づくものと考えられる。

前報<sup>35)</sup>の資料のなかで、『大和本草』及び『菜譜』には「黒芋ハ茎〔葉柄〕少黒シ」と述べられ、『本草図譜』には「くろいも」別名「くろから」は「茎紫黒色」と説明されているので、「黒芋」と記されているものでも必ずしも同一品種あるいは同一品種群に属するとは限らないようであるが、資料7、8、9及び25の「黒芋」が何れの品種群に属するか判別できない。

#### (9) 真芋

「真芋」を記載した資料は、「藪芋」、「唐芋」、「蓮芋」を記載した資料に次いで多く、29編である。このうち2編の資料17及び18の「まいも」は、前述のように、唐芋群に属するものと判断した。

前報<sup>35)</sup>の資料のうち、『草木図説』には「真芋」について、「芋〔サトイモ〕の類多種、吾郷辺ニ栽テ普ク食用トスルヲ、マイモト云、其種ニ早晚アリ、(中略)青芋ニシテ茎〔葉柄〕青ク」と述べられている。この「マイモ」は品種群を表し、唐芋群とは別群と考えられる。第2表には「真芋」が唐芋群に、また、「早生真芋」と「中生真芋」が土垂群にあげられている。

資料62—68は対馬国の各郷の産物帳で、それらのそれぞれに「真芋」が記されている。資料65では唐芋、蓮葉芋、藪芋、蓮芋の各群に属するものと判別したものの他に「真芋」があげられ、資料67でも唐芋、蓮葉芋、蓮芋の各群に属するものの他に「白いも」別名「真いも」があげられている。これら両資料の「真芋」は唐芋群、蓮葉芋群、藪芋群あるいは蓮芋群とは別の品種群、つまり、石川早生群あるいは土垂群に属するものではないかと推測されが、判別することはできない。また、これら以外の資料の「真芋」も何れの品種群に属するものか不明である。

#### (10) 鶴の子、ふとう及び芋卵

前報<sup>35)</sup>の資料のなかで「鶴の子」を記載した6編はすべて九州で成立した資料で、『筑前国統風土記』及び『大和本草』には「つるの子」に大小2品種があると述べられている。本資料の『筑前国産物帳』(資料69)にも「つるのこ」があげられ、「大小二種あり 又ふとうともいふ」と付記されている。

『大和本草』には「ツルノコハエグイモトモ サトイモトモ云フモノナリ」と註記されている。石井<sup>16)</sup>は、「藪芋類」を子芋の形によって丸形と長形の2群に分け、「まるじまいも」(丸縞芋)と「ながしまいも」(長縞芋)の2品種を代表品種としてあげ、福岡県の「鶴の子」はこの類であると述べている。一方、第2表には石川早生群と土垂群にそれぞれ「鶴の子」があげられている。吉武<sup>76)</sup>は、『筑前国産物帳』の「つるのこ」について「大の方は土垂群の中生長土垂に、小は石川早生群の石川早生丸に該当するように思われる」と述べている。しかしながら、この資料には、これら大小2品種の「つるのこ」について特性の記述がなされていないので、何れの品種群に属するか判別することは困難である。

なお、資料69の「つるのこ」の別名「ふとう」は「ぶとう」、「ふどう」及び「おどう」とも読める。「ぶとー」(不当)は福岡市や長崎県対島では「ぶかつこうなさま」あるいは「不細工」を表す方言であり、また、対馬では「丈につりあわない胴の太い物」を表す方言<sup>67)</sup>でもある。しかし、これらの方言と「つるのこ」との関係は不明である。

熊本県阿蘇郡阿蘇町・高森町一帯では古くから「鶴の子」が栽培されている。これは、葉柄が淡緑色で、その頸部は僅かに淡赤色を帯び、葉鞘縁辺部は緑色である。収穫時期には葉柄が地面に向って他の品種よりも極端に屈曲する。また、親芋は紡錘形で約200g、子芋は細長くて小さ

く、50g以下、孫芋は球状で小さい。収量は少ないが、貯蔵性が高く、主として子芋と孫芋が利用され、剥皮した芋の外部が硬くて煮くずれせず、内部は柔軟粘質で甘味があり、田楽に適し、自家用として4月下旬に植付け、10月下旬から11月上旬に収穫する栽培が行われている。この「鶴の子」は第2表の土垂群に属する「中生長土垂」の異名あるいは類似品種「鶴の子」に該当すると判断される。なお、この名称の由来について、現地では「子芋の先端部が丸く、基部が細長いのでツルの頭首部に似ているから」と説明している。『成形図説』<sup>56)</sup>には「鶴児芋」は早生の優良品種で、「芽長さが故に名く」と述べられている。阿蘇郡の「鶴の子」も収穫時には子芋の頂芽が細くて長く、欠け易い。

資料71, 72及び74のそれぞれ「鶴のこ」、「鶴の子」、「つるのこ」は土垂群の「鶴の子」に該当するのではないかと考えられるが、詳細は不明である。

資料12—19は『郡方産物帳』である。この産物帳の特徴の一つは、前述のように、植物の種類の特性が略記されているとともに、殆どの種類に漢名が付記されていることである。資料13, 14, 17, 18及び19にはそれぞれ「鶴ノ子いも」、「つるのこいも」、「まいも」、「まいも」、「こいも」をあげた後に、続けてそれぞれに「芋卵」が付記されている。これらの種類に関する特性の記述からは資料13の「鶴ノ子いも」と資料14の「つるのこいも」が同一種類かどうか判別できないが、これらと、前述のように、唐芋群に属するものと判断した資料17, 18の「まいも」及び資料19の「こいも」とは互に異種類と考えられる。なお、下川<sup>53)</sup>は「ツルノコ」が加賀地方ではサトイモの総称名として用いられていたと述べているが、資料13及び14のそれぞれ「鶴ノ子いも」と「つるのこいも」は品種名あるいは品種群名として取扱われている。

資料15には「いこいも・青芋」をあげ、その特性を「葉くき〔葉身、葉柄〕共色青し、子長く或は短く色白し」と述べ、「子長く」の右に(原文は縦書き)、「芋卵」が付記されている。従って、上述の資料の「芋卵」は特定の品種を指しているとは考えられない。なお、前報<sup>35)</sup>の資料のなかでは『成形図説』にのみ本文に「芋卵」が、また、絵図題として「芋卵」が記されている。この本文の「芋卵」は、「霜芋」別名「島芋」「根芋」「薺芋」の特性の記述に続けて「清人は芋卵或ハ芋仍と云」と述べたなかに記されている。つまり、清名の「芋卵」はわが国の「霜卵」に該当すると述べている。一方、別の個所では「芋卵 気味平滑にして小毒あり」と記している。この「芋卵」はサトイモの親芋あるいは「霜芋」の親芋を指しているものと思われる。

以上の資料の他に、「鶴の子」は資料27, 28, 57, 60及び61にもあげられているが、これらが何れの品種群に属するか判別できない。

#### (II) 蓮芋、白芋、てんちくいも及び水芋

第2表にあげられている15品種群のなかで、葉柄が食用となる品種群は数芋、赤芋、唐芋、八つ頭、みがしき、溝芋及び蓮芋の計7群で、このなかの蓮芋群を除いては、球根、葉柄ともに利用される。蓮芋群には「蓮芋」だけが属し、「蓮芋」は葉柄のみが利用され、数味が最も少なく、生食も可能である。また、他の群のサトイモとは形態的に異なる点も多く、同属異種 *Colocasia gigantea* Hook.f.である。

前報<sup>35)</sup>の資料には、葉柄を利用するサトイモ、特に、「蓮芋」は球根を利用するサトイモとは別に記される場合が多かった。本資料においても、「蓮芋」が記載されている35編の資料中、サトイモの種類が列記された最後に「蓮芋」をあげている資料が8編、「蓮芋」を別記している資料が10編みられた。従って、この記載様式に注目し、資料中の「蓮芋」が現存の「蓮芋」に該当するかどうかを判断する基準の一つとして、別記されている場合には、その「蓮芋」を「蓮芋」と判断した。

また、江戸時代には「蓮芋」の異名が多く、「八花芋」、「霜芋」、「露芋」、「白芋」、「しれ芋」、「唐

芋」,「栗芋」,「からいも」などとよばれていた<sup>35)</sup>。これらのうち,「白芋」は後述のように「蓮芋」以外の品種・品種群を,「唐芋」は前述のように「唐芋」あるいは唐芋群を,また,「栗芋」は後述のように「蓮葉芋」あるいは蓮葉芋群を表す場合もあった。従って,資料にサトイモの種類名が列記され,「蓮芋」とともに,「白芋」,「栗芋」及び「唐芋」の3種類があげられている場合,あるいは,蓮葉芋群と唐芋群に属する品種名が列記されている場合には「蓮芋」を「蓮芋」と判断した。また,「蓮芋」の特性が付記されている場合にはその特性も判別の基準とした。

以上の判別基準によって「蓮芋」を同定した結果,「蓮芋」を記載した35編の資料中,「蓮芋」と判断した資料は19編であった。

なお,「肥後国之内熊本領産物帳」(資料72)の「はすいも」は,上述の判別基準に適合しないが,『成形図説』<sup>56)</sup>に「蓮芋ハスイモの茎にて製れるハすくれり 肥後透芋ズイキ名高し」と記されているので,「蓮芋」と判断した。また,資料69には「はすいも」別名「くりいも」「はちいも」の他に,「白いも」別名「はすいも」「唐いも」「てんぢくいも」があげられている。このうち,後者が「蓮芋」に該当し,前者は「蓮葉芋」と判断した。「てんぢくいも」は前報<sup>35)</sup>の資料にはみられなかったが,『野菜園芸大辞典』<sup>11)</sup>には「蓮芋」を「天笠」(恐らく,笠は竺の誤記であろう)ともいうと記され,大分市下戸次<sup>9)</sup>及び大分県南海郡鶴見町<sup>15)</sup>では「蓮芋」が「天笠いも」とよばれている。

なお,資料69の「白いも」の項の原文は「はすいもともいふ 又唐いも てんぢくいもともいふ」と記されているが,この「はすいも」が解説文では「はついも」となっている。変体仮名の「す」と「つ」は類似している上に,前述のように異なる種類を表す名称に同一名称「はすいも」が記されているための錯誤と考えられる。また,本資料としては用いなかった西日本新聞社発行の『筑前国産物帳』<sup>60)</sup>の「白いも」の項の解説文には「はついもともいふ云々」と記され,「はすいも」の項には「はついも くりいもともいふ云々」と記されているが,この両「はついも」の「つ」は「す」の誤りで,いずれも「はすいも」が正しいと考えられる。本資料が編纂される以前に,筑前国で成立した『筑前国統風土記』,『大和本草』及び『菜譜』には蓮葉芋群のサトイモについて,それぞれ「栗芋」,「蓮芋」別名「栗芋」,「くりいも」別名「はす芋」と記され,蓮芋群のサトイモについては,それぞれ「白芋」,「唐芋」別名「白芋」,「白芋」別名「唐芋」とあり,『農業全書』でも蓮芋群のサトイモを「蓮芋」別名「白芋」と記している<sup>35)</sup>,これら何れの資料も蓮葉芋群及び蓮芋群のサトイモを「はついも」とはよんでいないことから『筑前国産物帳』の「白いも」の別名「はすいも」及び別項の「はすいも」は「はついも」ではなく「はすいも」が正しいと考えられる。

前報<sup>35)</sup>では,5編の資料に「蓮芋」別名「白芋」,あるいは,「白芋」別名「蓮芋」があげられていて,これらはすべて「蓮芋」と判断された。本資料では資料12,13及び16が「はすいも・白芋」と記し,資料60,61及び69が「蓮芋」別名「白芋」をあげている。この後者の資料60,61及び69の「蓮芋」別名「白芋」は,前述のように「蓮芋」と判断された。しかしながら,資料12及び13では「はすいも・白芋」についてそれぞれ「葉丸 色里いものことし」,「葉 常ノいもよりは丸く くき青ク 子丸ク色薄白し」と述べられているので,これらの記述から判断すると蓮葉芋群に属するものと考えられるが,詳細は不明である。また,資料16の「はすいも・白芋」には註記がなく,判別できない。

資料5,7及び67では「白芋」の他に「蓮芋」があげられていることから,この「白芋」は「蓮芋」以外の品種と推測される。第2表には,蓮葉芋群と土垂群にそれぞれ「白芋」があげられている。恐らく,資料5,7及び67の「白芋」はこれらのうちの何れかに属する品種と考えられるが判別できない。また,資料2,8,10,57,70及び71の「白芋」も何れの品種群に属するものか判別できない。

資料60の「蓮芋」別名「白イモ」「水芋」は、他のサトイモとは別に記されているので「蓮芋」と判断した。周防国では「蓮芋」を「白イモ」あるいは「水芋」ともよんでいたことがうかがわれる。

前報<sup>35)</sup>の資料では、「水芋」は『私家農業談』、『成形図説』、『本草図譜』及び『草木図説』にあげられていて、『本草図譜』の「水芋」のみを溝芋群の「水芋」と判断した。『本草図譜』にはこの「水芋」を肥後では「ミついも」とよんでいると記している。1764年に肥後国で薬物展示研究会が開られた際の記録『熊府薬物会目録』にあげられている「水芋 郷語ミズイモ」は、溝芋群の「水芋」として「サトイモの一品ミズイモ *Colocasia antiquorum* Schott form. *antiquorum* Makino」であると報告されている<sup>7)</sup>。また、『紀州在田郡広湯浅庄内産物』<sup>36)</sup>には「水芋」について「水中に栽蒔 初夏より葉を摘て羹トシ菜として常の芋より味すくれて蕪味あらずといへり 此茎肥之後州より多産ス」と述べられている。この「水芋」も溝芋群の「水芋」と考えられる。従って、『肥後国之内熊本領産物帳』(資料72)の「水芋」を溝芋群の「水芋」と判断しても誤りではないように思われる。

#### (12) 栗芋及びはちいも

蓮葉芋群あるいは「蓮葉芋」は、本資料にも前報<sup>35)</sup>の資料にも「蓮葉芋」という名称では記されていない。前報<sup>35)</sup>の資料では「栗芋」、「蓮芋」、「百果芋」、「小芋」及び「股黒」として表されている。これらの名称のうち、「栗芋」と「蓮芋」は、前述のように、「蓮芋」を指す場合もあるので、「蓮葉芋」あるいは蓮葉芋群と判断する基準として、同一資料に「栗芋」と、「蓮芋」を表す名称とが記載されている場合に限った。このような基準によって、15編の資料にあげられている「栗芋」を同定した結果、10編の資料の「栗芋」が蓮葉芋群に属するものと判断された。

なお、対島国の産物帳(資料62—68)にはサトイモの種類として「赤芋(ほうとう)」、「栗芋」、「数芋」、「真芋」が、また、資料64と68を除いた他の資料には「蓮芋」も記載されている。資料64と68は「蓮芋」を欠いているので、これら両資料の「栗芋」は、上述の蓮葉芋群のサトイモと判断する基準に適合しない。しかしながら、他の資料(62, 63, 65, 66, 67)の「栗芋」は蓮葉芋群のサトイモと判断されたので、資料64と68の「栗芋」を蓮葉芋群のサトイモと判断しても誤りではないように思われる。

前述のように、資料69の「はすいも」別名「くりいも」「はちいも」は蓮葉芋群のサトイモと判断したが、資料71の「鉢いも」は何れの品種群に属するものか判別できなかった。

#### (13) 八つ頭、またくろいも、八つ口及び赤どう

下野国の資料7, 8及び9のうち、資料7には「またくろいも 此同種別 くりいも 八ツかしら共申候」と記され、資料8には「また黒」と「八つかしら」とは分けて別に記されている。従って、これら両資料のそれぞれ「八ツかしら」と「八つかしら」とは同一品種あるいは同一品種群とは考え難い。これらの資料が編纂されてから約100年後に武蔵国で成立した『耕作仕様書』<sup>6)</sup>にも、前報<sup>35)</sup>で「八つ頭」と判断した「八つ頭芋」と、蓮葉芋群に属すると判断した「栗芋」別名「小いも」「股黒」とは別に記されている。また、『物類称呼』<sup>23)</sup>には「蓮芋 武州品川にて八つかしらと云 又栗芋といふ所を」と述べている。この「蓮芋」別名「八つかしら」「栗芋」は「蓮芋」ではなく、『大和本草』<sup>21)</sup>所載の「蓮芋」別名「栗芋」と同じ「蓮葉芋」あるいは蓮葉芋群に属するものと推測される。従って、「八つ頭」と記されていても蓮葉芋群あるいは蓮葉芋群に属する品種を指す場合もあるのではないかと考えられる。

資料所載の「八つ頭」を現存品種群の何れに属するかを判別する基準として、同一資料に「八つ頭」と蓮葉芋群に属する品種とが別記されている場合、その「八つ頭」を八つ頭群に属するものとした。このような判別基準によって7編の資料の「八つ頭」を同定した結果、3編の資



料(5, 8, 69)の「八つ頭」が八つ頭群に属すると判断された。なお、資料7の「またくろいも」別名「くりいも」「八つかしら」は、前述の蓮葉芋群のサトイモの判別基準によって蓮葉芋群に属するものと判断し、資料8の「また黒」は同じ国(下野)の資料に記載されているので、蓮葉芋群のサトイモと判断した。

「口(くち)」は物事の初め、おこり、端緒を表す場合もある<sup>41)</sup>。沖縄県宜野湾市では「くち」はサトイモの繁殖用の小苗を指す。サトイモの品種名「八つ口」は、恐らくこれらに因んで名付けられたものと想像される。屋久島の「ヤツクチ」<sup>54)</sup>、鹿児島県垂水市の「やっくついも」あるいは「やっぐ」<sup>67)</sup>は何れも八つ頭群に属する品種である。また、宮崎県児湯郡西米良村にも「八つ口」が栽培されている<sup>37)</sup>。前報<sup>35)</sup>の資料のなかでは島津藩で編纂された『成形図説』にのみ「八頭芋」<sup>ヤツカシライモ</sup>について「八口とも親せ賀美芋など云」と記されている。本資料では『肥後国之内熊本領産物帳』(資料71)と『日向国諸縣郡産物帳』(資料74)にそれぞれ「八つ口」、「やっ口」があげられ、両資料ともに他に「八つ頭」の記載はない。恐らく「八つ口」は熊本県及び宮崎県以南で八つ頭群に属する品種に名付けられた名称と考えられ、これら両資料の「八つ口」は八つ頭群の品種と判断した。

「あかど」は、熊本県阿蘇郡の山間部で現在も栽培されていて、前報<sup>35)</sup>でその特性と利用を紹介し、八つ頭群に属する品種であると判断した。しかしながら、『聞き書 熊本の食事』の「阿蘇の食」の著者<sup>17)</sup>による私信では、阿蘇地方で葉柄を漬物として利用する「赤ど」には2系統があり、一つは八つ頭群に、他は唐芋群に属すると判断される。本資料では『豊後国之内熊本領産物帳』(資料71)と『肥後国之内熊本領産物帳』(資料72)にのみそれぞれ「赤どう」と「赤とう」があげられ、これらは、前報<sup>35)</sup>の資料に全く記載されていないので、この地方に限られた呼称と考えられ、現存の「赤ど」を指すものと推測されるが、上述の八つ頭群あるいは唐芋群の何れに該当するか判別できない。

#### (14) 与五郎芋

「与五郎いも」は『伊賀国産物図』(資料52)に記載され、その絵図は欠落しているが、註書が残っている。それには「里芋乃子〔子芋〕頭芋〔親芋〕をはなれ生立る故 子乃形大にして丸ク味ひ親せめよりハよろしく 茎葉〔葉柄と葉身〕ハ同事〔親せめに似ている〕」と記されている。第2表には土垂群に属する「晩生長土垂」の異名あるいは類似品種として「与五郎芋」があげられている。上述の註記が土垂群の特徴をよく表していることから「与五郎いも」は土垂群に属する「与五郎芋」と判断される。

#### (15) 親せめ及びおやせつき

「親せめ」は、「与五郎いも」を記載した資料と同じ『伊賀国産物図』にのみあげられている。絵図は欠落しているが、その註書に「親せめとは里芋之内 子芋乃生立 頭芋に取付出来る故子の形尻細ニしてひらみ有 数々乃子芋 親芋に取付有之 親芋小し 味ひ葉茎里芋ニ替ることなし」と述べられている。第2表には「親責」が石川早生群の「石川早生丸」及び土垂群の「早生長土垂」の異名あるいは類似品種としてあげられている。上述の註書に述べられた「親せめ」の特徴、特に、親芋が小さく、多くの子芋が親芋に着生し、子芋の基部が平たくて細いなどの点から、「親せめ」は石川早生群の「親責」と同一品種あるいは類似品種と判断される。

資料33, 49, 50及び51に記載されている「おやせつき」の名称の由来は、「親せめ」と同様に、親芋の周囲に子芋が密生している状態に因むものと推測される。親芋を取り囲むように多くの子芋が着生する品種群としては数芋、蓮葉芋、石川早生、土垂、黒軸、薑芋、八つ頭の各群が考えられるが、「おやせつき」がこれらの何れに属するか判別できない。

## (16) 白から及びからしろ

「白から」は伊豆国、美濃国及び尾張国の各産物帳に、また「からしろ」は美濃国の産物帳にのみあげられているが、「白から」と「からしろ」を同時に記載した資料はない。「白から」や「からしろ」の「から」は柄、殻、幹、茎あるいは唐の漢字が当るものと考えられるので、主として葉柄を指し、「白」は葉柄が淡緑色であることを意味するものと思われる。淡緑色の葉柄をもつ品種としては先ず「蓮芋」があげられるが、美濃国の産物帳には、前述のように「蓮芋」が記載されているので、「白から」あるいは「からしろ」は「蓮芋」ではないようである。

前報<sup>35)</sup>の資料では、これらの呼称に近い名称としては『清良記』にのみ「白唐芋」と「柄白芋」が記されている。また、第2表には石川早生群の「白茎京芋」、土垂群の「白茎早生」、唐芋群の「白茎海老芋」及び八つ頭群の「白茎八つ頭」があげられている。しかしながら、これらの品種や他の品種・品種群と「白から」あるいは「からしろ」との関係は不明である。

## (17) こいも

「こいも」は資料19, 24, 25, 26, 57及び59に記載されている。資料19の「こいも」には漢名「芋卵」が付記され、その特性について「葉〔葉身〕色青丸広 くき〔葉柄〕色赤黒く 子〔子芋〕丸長く 色赤く 春土用頃植 十月頃出来」と述べられている。前報<sup>35)</sup>の資料では、『会津農書附録』及び『耕作仕様書』に「小いも」があげられていて、前者の「小いも」が属する品種群は不明であるが、後者の「小いも」は蓮葉芋群に属する品種と判断された。資料19の「こいも」は、葉柄の色が赤黒い特性を有するので蓮葉芋群に属するとは考え難く、恐らく、黒軸、赤芽、唐芋あるいは八つ頭の何れかの群に属するものと推測されるが、詳細は不明である。また、資料24, 25, 26, 57及び59の「こいも」も何れの品種群に属するか判別できない。

## (18) さゝいも、スゝカネ及び竹の根

『筑前国産物帳』（資料69）は「さといも」を「さゝいも」ともいうと述べ、これに属するものとして「つるのこ」、「青いも」、「竹の根」及び「しゃうかいも」をあげ、「赤いも」や「八がしらいも」などを別記している。従って、この「さといも」別名「さゝいも」は芋のみを食用とする品種群名と考えられる。一方、『周防産物名寄』（資料60）及び『長門産物名寄』（資料61）では「芋」を「里芋」あるいは「青芋」とよび、これに属するものとして「サゝイモ」や「鶴ノ子」などをあげている。従って、これら両資料の「サゝイモ」は品種名と考えられる。しかしながら、資料69の「さゝいも」群、あるいは資料60及び61の「サゝイモ」が、それぞれ現存の何れの品種群、あるいは品種に該当するか不明である。

資料5の「スゝカネ」はササの根に由来する名称と考えられる。また、資料69の「竹の根」も「スゝカネ」と言葉の意味ではよく似た名称である。第2表のなかで、ササの根やタケの根のように細長い芋あるいは匍枝を着生する品種としては、一般に食用としない「沖縄青茎」<sup>28)</sup>と葉柄を主として利用する「みがしき」だけで、「スゝカネ」や「竹の根」がこれらに該当するかどうか不明である。特に、「竹の根」は、上述のように芋を食用とする品種群に属するサトイモで、「沖縄青茎」あるいは「みがしき」に該当するとは考え難い。

『本草図譜』<sup>19)</sup>には「野芋」の1種類として匍枝が長く伸長した絵図が描かれていて、「上州 下総等の河の中或泥池の中に生ず 葉の形青芋に似て 根〔匍枝〕白く竹の如く末〔その先端〕に芽を出し 細長の塊りをなす これまたとくいもの類にして味ひ甚々蕪く毒あり 食へられず」と註記され、朱書の一文「タケイモ毒なし食ふべし」が添えられている。この絵図は、『草木図説』<sup>14)</sup>で「タケイモ」別名「傀儡芋」について説明されている「葉形前種〔エグイモ〕ニ同ウシテ根結塊〔芋〕多カラズ、ソノ子〔子芋〕ヲ出スヤ地面ニ横延シ、太サ拇指ノ如ク長七八寸或ハ尺餘ニ至ル」をよく表しているように思われる。常陸国で編纂された資料5の「スゝカ

ネ」は、『本草図譜』の「タケイモ毒なし食ふべし」と加筆された「野芋」の1種類や『草木図説』の「タケイモ」別名「傀儡芋」ではないかと推測されるが、詳細は不明である。

#### (19) 早芋及びわさ

資料5にのみ「早イモ」があげられている。また、資料74の「わさ」は「わせいも」の地方名と考えられる。前報<sup>35)</sup>の資料では『成形図説』、『菜園温古録』及び『耕作仕様書』にそれぞれ「早芋」<sup>ワサイモ</sup>、「早芋」<sup>ワサイモ</sup>、「わせ芋」があげられていて、これらは、前報<sup>35)</sup>では石川早生群あるいは土垂群の何れかに属するものと推測された。資料5の「早イモ」及び資料74「わさ」も、恐らく石川早生群あるいは土垂群に属するものではないかと考えられるが、判別できない。

#### (20) キャウイモ

「キャウイモ」は、常陸国の『御領内産物留』（資料5）にのみ、数芋、蓮葉芋、唐芋、八つ頭、蓮芋の各群に属する品種及び「早イモ」、「里イモ」、「白イモ」、「ドタイモ」、「スミカネ」とともにあげられている。

「キャウイモ」は、前報<sup>35)</sup>の資料には全く記載されていないが、昭和時代以降の文献にみられる。大野<sup>46)</sup>は、京芋は海老芋あるいはエビコともよばれ、「唐の芋」の特殊な栽培によってできた車エビ状の子芋そのものを言うとし、その栽培法の起源については詳でないとし、安永年間（1772—1781年）に長崎から京都へ導入した芋種を京都市南部四ツ塚地方で栽培したことに始まると述べている。一方、富樫<sup>66)</sup>や西野<sup>46)</sup>は唐芋群の一品種「海老芋」を「京芋」とよぶと述べ、また、青葉<sup>4)</sup>や大和<sup>72)</sup>は「筍芋」を市場では京芋とよんでいると述べている。

第2表には、石川早生群の品種として「白茎京芋」及び「京芋13」があげられている。資料5の「キャウイモ」が唐芋群あるいは石川早生群に属するかどうか不明である。

#### (21) しんずい

下野国で編纂された資料7には数芋、蓮葉芋、唐芋、蓮芋の各群に属する品種の他に「くろいも」と、「しろいも」別名「しんずい」があげられている。この「しんずい」という名称に近いものとしては『会津農書附録』<sup>52)</sup>の「大しんずい」と「小しんずい」があり、これらは関東で栽培されているサトイモであると説明されている。しかしながら、これらを含めて資料7の「しんずい」が現存品種・品種群の何れに該当するか不明である。

#### (22) あきいも

「あきいも」は、前報<sup>35)</sup>の資料には記載がないが、本資料では『伊豆国君沢郡田方郡加茂郡産物并絵図帳』（資料25）にのみあげられている。

「あきいも」はジャガイモの1品種の方言として山形県西置賜郡、新潟県佐渡及び長野県で用いられている<sup>67)</sup>ので、資料25の「あきいも」はジャガイモとも推測される。しかし、資料25には「芋〔サトイモ〕」として「黒いも」、「とうのいも」、「しまいも」、「小いも」、「白から」及び「ゑぐいも」とともにあげられ、「薯蓣（長芋）」や「薩摩芋」とは明らかに区別して取扱われているので、ジャガイモとは考え難い。しかしながら、「あきいも」がサトイモの何れの品種群に属するか不明である。

#### (23) 女郎いも

前報<sup>35)</sup>の資料には「女郎いも」の記載はない。「女郎いも」を「しょうろいも（松露芋）」の転訛と考えれば、『草木育種』<sup>18)</sup>に「馬鈴薯 せうろいも又ゑぞいも 又おらんだいもとも云」とある。「しょうろいも」は江戸時代には房総や紀伊でもジャガイモを指していた<sup>67)</sup>。

伊豆国の産物帳である資料26には「女郎いも」が「里いも」の種類としてあげられている。しかし、これが何れの品種・品種群に該当するか不明である。

## (24) 地芋

『飛州志』(資料30)には「芋〔サトイモ〕」の種類として「地芋」が記されている。前報<sup>35)</sup>の資料には「地芋」は記載されていないが、『日本方言大辞典』<sup>67)</sup>によれば、岐阜県、愛知県、三重県の一部、和歌山県の一部、徳島県及び香川県でサトイモの総称名として用いられている。

恐らく、イモ類のある種、あるいはサトイモのある品種が新しく導入された場合、従来から栽培していたものを「地芋」とよぶようになったものと想像されるが、資料30の「地芋」が何れの品種群に属するか不明である。

## (25) ほどいも

『美濃国之内産物 羽栗郡之内』(資料31)には「ほどいも」が「芋〔サトイモ〕」の種類としてあげられている。前報<sup>35)</sup>の資料には「ほどいも」はサトイモの品種・品種群としては全く記載がなく、資料31の「ほどいも」が何れの品種・品種群に該当するか判別できない。なお、「ほどいも」は、方言としては岩手県の一部、徳島県美馬郡・三好郡及び愛知県の一部でジャガイモを、また、青森県南部、秋田県鹿角郡及び高知県土佐郡ではホドを指す<sup>67)</sup>。

## (26) 赤から

「赤から」は、前報<sup>35)</sup>の資料では『本草図譜』と『耕作仕様書』にあげられていて、唐芋群に属するものと判断された。本資料では資料34の美濃国の産物帳にのみ「赤から」が記されているが、これが何れの品種・品種群に該当するか判別できない。

## (27) つくし

「つくし」は『美濃国之内産物 武儀郡之内』(資料36)にのみあげられている。前報<sup>35)</sup>の資料には「つくし」は全く記載されていないが、『聞き書 岐阜の食事』の「奥掛斐〈徳山〉の食」<sup>70)</sup>に「つくしいも」があげられ、「在来種」と付記されている。この「つくしいも」が何れの品種群に属するか不明であるが、武儀郡は掛斐郡に近い距離に位置するので、資料36の「つくし」はこの「つくしいも」ではないかと推測される。

なお、「つくし」は「つぐし」、「つぐめ」(鶉)の転訛である<sup>67)</sup>。「つくミいも」は遠江・三河で成立したと推定されている『百姓伝記』<sup>69)</sup>に記載されていて、「子多くずいきも味ひよし」と述べられている。青葉<sup>3)</sup>は、この「つくミいも」を「赤鷄芋」と推定している。

## (28) 都芋

本資料では『紀州産物帳』(資料55)にのみ「都芋」があげられている。この資料を参考として1736年から1800年代前半までに編纂されたと推定されている『紀州在田郡広湯浅庄内産物』<sup>27)</sup>には、「芋」として「真芋」、「唐いも(連禪芋)」などと共に「紫芋」があげられ、「紫芋」と記された左右(原文は縦書き)にそれぞれ「ミヤコイモ」、「ツルグロ」と振仮名が付けられている。従って、これら両資料のそれぞれ「都芋」と「紫芋」は同一品種あるいは同一品種群に属するものと考えられるが、現存品種・品種群との関係は不明である。

## (29) ドタイモ、白里いも、白がしら、青がしら、赤がしら、黒がしら、黒、小くろ、なごや、わきくろ及びめうすあん

これら11種類のサトイモについては前報<sup>35)</sup>の資料にも、第2表にも記載がなく、現存の何れの品種・品種群に該当するか判別できない。

なお、資料55の「はしかみ芋」、資料69の「しょうかいも」及び資料72の「姫いも」については「調査結果及び考察」の3の(5)及び(6)で述べた通りである。

## 5. 資料所載のサトイモの渡来時期と分布

サトイモの種類は、調査した74編の資料に、同種類異名を含めて約70が記載されていた。種

類別には、「数芋」が最も多く、44編の資料に、次いで「唐芋」42編、「蓮芋」35編、「真芋」29編、「里芋」18編、「赤芋」、「白芋」、「栗芋」各15編、その他の順に記載されていた。また、判別できた品種を記載した資料数は、数芋群では53編、唐芋群21編、蓮芋群19編、蓮葉芋群13編、八つ頭群6編、石川早生群、土垂群、薑芋群及び溝芋群各1編であった。

数芋群は、陸奥国から九州の諸国まで広範囲に分布し、常陸国や美濃国安八郡では「数芋」の他に「青から」が、また、伊豆国君澤郡では「数芋」の他に「嶋芋」が栽培されていた。本資料よりも約50年以上も前に成立したと推定される『百姓伝記』<sup>69)</sup>にも数芋群に属するものと判断された<sup>35)</sup>「ゑごいも」、「嶋いも」及び「青から」が記載されているので、数芋群は江戸時代中期までに少なくとも3品種が存在していたことが明らかである。

‘数芋’あるいは数芋群の品種は、多くの文献<sup>12)55)58)</sup>では、芋、特に、親芋や葉柄に数味があり、食用に不適と述べられているが、資料25の「しまいも」や一部の文献<sup>6)</sup>にもみられるように、食用に適するものがあり、品種・系統間で数味の程度に強弱がある<sup>10)28)63)</sup>。

サトイモは、わが国のプレ農耕段階における半栽培型の作物の一つとして渡来したと考えられていて、そのサトイモとしては数芋群に属すると判断されている長野県青木村の‘弘法芋’<sup>62)</sup>があげられている<sup>51)</sup>。また、サトイモは、水稻栽培が始まる以前には照葉樹林焼畑農耕文化の作物として主要な位置を占め<sup>49)</sup>、1965年頃まで続いた焼畑<sup>50)</sup>では、「エグ芋」<sup>48)</sup>、「エゴイモ」、「シマイモ」、「ヨゴイモ」<sup>43)</sup>など数芋群に属する品種が主として栽培されている。数芋群は、上述のように、芋、葉柄ともに食用となる品種・系統を含み、耐寒性<sup>26)60)</sup>、耐湿性<sup>53)55)</sup>、耐干性<sup>9)28)</sup>、多収性<sup>11)45)</sup>で、日陰でも減収せず<sup>11)28)</sup>、中生<sup>11)28)</sup>で、年による豊凶の差が少なく<sup>53)</sup>、比較的低温でも発芽する<sup>26)60)</sup>などの特性を具えていることから、常畑はもちろん、日照時間が短く、秋が早い山間における粗放的な焼畑栽培に適し、広く分布していたものと考えられる。

「数芋」の名称は、その親芋や葉柄の強い数味に由来していると推測されている<sup>8)60)72)</sup>。上述のように、わが国に最初に渡来したサトイモが数芋群に属する品種・系統で、その後に導入されたサトイモと比較して強い数味を有していたために、「数芋」とよばれるようになったものとも想像される。しかしながら、‘弘法芋’は芋も葉柄も食用となり、数芋群のサトイモは、わが国のサトイモのなかで最強の数味をもっているとは必ずしも云えない<sup>63)</sup>ので、上述のような「数芋」の名称由来説には若干の疑問が残る。

「数芋」は、地方によって「いぐいも」、「いごいも」、「えぐりいも」、「えご」、「えごいも」、「よごいも」などとよばれているので、これらの呼称はすべて方言と考えるのが妥当かもしれない。しかし、「えごいも」の「えご」は、「えぐ(数)」の変化した言葉の他に、1)山、溪谷などの切れ込みやくぼみ、また、そこにできた水溜り、2)川の入江や堀割、3)灌漑のための用水路、田の水口などを指す<sup>38)</sup>。また、その方言としては、クワイあるいはクログワイを指す他に、1)山の頂、峰、2)尾根、3)丘陵に囲まれた地、4)山の斜面のくぼ地、5)谷、6)浅い谷、谷間、7)支谷、8)岩穴、岩と岩の間、9)川の淵や底の魚が隠れすむ穴、10)溝などを意味する<sup>67)</sup>。前述のように、数芋群の品種・系統が焼畑で栽培されてきたサトイモだとすれば、「えごいも」は山あるいは谷に関係する方言「えご」に因む名称ではないかと推測される。また、‘弘法芋’や鳥取県関金町の‘えぐ芋’、佐賀県鳥栖市に野生状態で生育している数芋群のサトイモ<sup>62)</sup>、数芋群に属すると判断された『草木図説』の「水イモ」<sup>35)</sup>、『出雲国産物名疏』(資料57)の「川イモ」は水辺あるいは溝に生育していることから、「えごいも」は水辺や溝の方言「えご」に由来し、「数芋」は「えごいも」から変化した名称ではないかとも推測される。

なお、『出雲国産物名疏』の循縫郡の個所にみられる「川イモ」は、絵図とともに「春沢辺ニ生シ 秋ハ枯 葉長サ八九寸 三角ニ少長ミアリ 茎寸四五歩 長サ尺六七寸位 花実付不申

候」と記されている。この「川イモ」は絵図とその註記から野生状態で生育している藪芋群の1系統と判断され、『出雲国風土記』の循環郡の条に記載されている「<sup>イモ</sup>芋」と関係があるのではないかと想像される。

唐芋群のサトイモは、「唐芋」の他に「ほうどう」、「赤芋」、「紫芋」、「赤ずいき」、「真芋」など種々の名称をもつばかりでなく、「唐芋」は、「蓮芋」を指す場合もあり、判別が困難で、42編の資料に記載がみられたが、唐芋群のサトイモと判別できた資料は、常陸、下野、加賀、越中、周防、長門、対馬及び筑前の8か国のものに限られ、僅かに10編であった。しかしながら、『百姓伝記』にも唐芋群のサトイモが記載されている<sup>35)</sup>ので、遠江・三河国にも分布していたことは明らかで、生育期間が短い羽前国や岩代国には唐芋群に属する「柄取芋」が、また、筑前国には「大芋」が、肥後国では「白頭」が記載され、当時、少なくとも4品種が存在していたことが明らかである。さらに、岩代国の資料には赤茎と青茎の2系統の「柄取芋」が記載されている。江戸時代中期におけるこのような品種・系統の存在から、『言継卿記』(1527—1569年)の唐芋や『多聞院日記』の永禄11年(1568)の条に記されている「唐ノ芋ノ種、里芋ノタ子堯ヨリ持了」<sup>75)</sup>の「唐ノ芋」も唐芋群のサトイモではないかと想像される。

「蓮芋」は常陸、下野、美濃、和泉、周防、長門、対馬、筑前、肥後及び日向の計10か国に分布していたことがわかった。「蓮芋」は「白芋」ともよばれ<sup>35)</sup>、『郡方産物帳』(資料12, 13, 16)に「はすいも・白芋」と記されているが、これらは、その註記から「蓮芋」よりもむしろ「蓮葉芋」ではないかと考えられる。また『料理無言抄』(1729年)に金沢は寒いので蓮芋はないと記載していることが紹介されている<sup>22)</sup>ので、加賀国や能登国には、当時、「蓮芋」が分布していなかったことは確かなようである。

「蓮芋」は、本資料が編纂される以前に成立した『清良記』や『会津農書附録』、『農業全書』などにも記載され<sup>35)</sup>、『多聞院日記』には精進の刺身として、鱈よりは厚く切って醬、酢などの調味料を添えた午夢、蓮芋、こんにゃくなどが用いられていたことが紹介されている<sup>75)</sup>ことから、江戸時代以前に既に渡来していたものと推測される。

「八つ頭」は、「八つ頭」の他に、肥後国や日向国では「八つ口」ともよばれ、常陸、下野、筑前、肥後、日向の5か国に分布がみられた。『図説江戸時代食生活事典』<sup>39)</sup>には「ヤツガシラの伝来ははるかに〔室町時代よりも〕後世で、寛政(1789—1801)以前の記録はないようである」と述べられているが、八つ頭群に属すると判断される「実赤芋」が『清良記』にあげられ<sup>35)</sup>、本資料でも5か国で「八つ頭」が記載されているので、「八つ頭」は江戸時代初期には既に渡来していたものと推測される。

溝芋群の「水芋」は『肥後国之内熊本領産物帳』にのみあげられていた。「水芋」は主として葉柄が利用され、種芋の貯蔵が困難で、現在でも、その分布範囲は比較的暖い福岡、佐賀、広島、岡山などに限られている<sup>11)</sup>。

『日本の食生活事典II』<sup>44)</sup>には、サトイモの葉柄が、産婦の「古血を下す」、「肥立ちを助ける」あるいは「乳の出をよくする」などの理由から、2府22県で利用されていることが記されている。また、牛馬の産後にも味噌汁の実として与えられていたという。この全集は大正末から昭和初期の食生活に関する聞書ではあるが、サトイモの葉柄は、その薬効が『本朝食鑑』<sup>12)</sup>その他にも述べられていることから、江戸時代においても民間薬として利用されていたものと推察される。前報<sup>35)</sup>では、江戸時代における葉柄用のサトイモの品種数が多い理由として、それらの葉柄が根菜や端境期の野菜として利用されていたことをあげたが、民間薬としての役割も加えるべきで、本資料においても、藪芋群をはじめ、唐芋群、蓮芋群、八つ頭群に属する品種が多く、国で記載されているのも、主としてこれらの理由によるものと推測される。

蓮葉芋群のサトイモは、「蓮葉芋」の名称では全く記載がなく、「栗芋」、「蓮芋」、「股黒」、「八つ頭」などとよばれ、その分布は常陸、下野、周防、長門、対馬、筑前の6か国にみられた。

‘薑芋’は、その草姿や球根の着生状態が‘八つ頭’に類似しているが、芽が赤く、葉柄が淡緑色、3倍体である点などで‘八つ頭’とは異なっている。この‘薑芋’については、『筑前国産物帳』にのみ記載がみられた。

わが国の現存のサトイモ15品種群のうち、子芋を主として利用する数芋、蓮葉芋、石川早生、土垂及び黒軸の5品種群には、他の品種群と比較し同品種異名を含めて品種数が多い。このことは、恐らくこれらの品種が早い時期に渡来し、広範囲に分布していたことを物語っているものと考えられる。しかしながら、前報<sup>35)</sup>の資料では石川早生群及び土垂群の品種については、それらの特性の記述を欠くか、あるいは、両群に類似点が多く、特性が記述されていたとしても不十分なために、全く判別することができなかった。本資料においても、石川早生群あるいは土垂群の品種に該当するものと推測される「真芋」、「里芋」、「鶴の子」、「白から」、「こいも」などの名称が記載されていたが、それらと現存品種との関係については殆ど明らかにすることができなかった。ただ、『伊賀国産物図』には、「親せめ」と「与五郎いも」について、比較的に詳細にその特性が記されているので、それぞれ石川早生群の‘親責’と土垂群の‘与五郎芋’に該当すると判断した。

熊沢・本多<sup>24)</sup>は、石川早生群を除く、わが国の主要品種群は中国にも存在することを述べるとともに、石川早生群はその理由は不明であるが、中国には一般に分布がみられないと記し、わが国で育成された品種群であることを示唆している。また、熊澤<sup>26)</sup>は、‘石川早生’について「大阪府南河内郡石川村の原産といわれ、(中略)この品種のできた経過は明らかではない」と述べ、‘土垂’についても「石川早生とともに古代の事情が比較的に不明瞭である」と記し、「品種の時代的考察」の表に、『大和本草』の「鶴の子」や『成形図説』の「早芋」及び「鶴の子」を、石川早生(群)と土垂(群)とを一括した欄に記入している。このように、江戸時代の資料に記された多くのサトイモ品種のなかで、石川早生群あるいは土垂群に属する品種を推定することはできても、特定することができなかったが、徳川時代中期に石川早生群に属する‘親責’と土垂群に属する‘与五郎芋’が存在していた証拠が判明したことは、これら両群の品種の起源、分布、変遷を明らかにする上で意義あるものと思われる。

## 摘 要

享保19年(1734)に、幕府は全国諸領主へ産物帳の作成を命じ、わが国で初めて全国的規模での農産物を含む天産物の調査が行われた。これらの産物帳は、その後、幕府へ提出されたが、理由不明のまま、すべてが消失している。『享保・元文諸国産物帳』はその産物帳の本文、絵図及びそれらの註書の控えを指す。

本報は、『享保・元文諸国産物帳』所載のサトイモの品種を同定するとともに、江戸時代中期(1735—1746)におけるサトイモの分布について検討したものである。調査には盛永俊太郎・安田 健編の『享保・元文諸国産物帳集成』全16巻のなかの74編の資料を用いた。

これらの資料には、天産物は一定の様式で記載されているが、イモ類は必ずしもそのような様式で記載されていない。従って、サトイモの品種の同定に当っては、その記載順序を重視するとともに、同一種類名を抽出し、それらと引用文献中の種類とを比較検討した。なお、資料には品種とその異名が明確に区別されずに記載されているので、本報では品種とその異名を併せて表わす用語として「種類」を用いた。また、本報で用いた品種名及び品種群名は主として

熊澤三郎著『蔬菜園芸各論』のなかの名称に準じた。

北海道と四国を除いた36か国の74編の資料にサトイモに関する記載があり、その種類数は約70であった。種類別では「数芋」が44編の資料に、「唐芋」が42編、「蓮芋」35編、「真芋」29編、「里芋」18編、「赤芋」、「白芋」、「栗芋」各15編、その他の順に記載されていた。また、判別できた品種を記載した資料数は、数芋群では53編、唐芋群21編、蓮芋群19編、蓮葉芋群13編、八つ頭群6編、石川早生群、土垂群、薑芋群及び溝芋群各1編であった。これら各群に属する種類とそれらの分布は以下の通りである。

数芋群：「数芋」は貯蔵性が高く、不良環境下でも高収量をもたらすので、江戸時代中期には最も一般的に栽培されていたサトイモと考えられる。資料には「数芋」、「島芋」、「青芋」、「花咲」や数芋の転訛と思われる「えごいも」、「えごりいも」、「えぐりいも」、「いごいも」、「よごいも」などがみられた。少なくとも3品種（「数芋」、「島芋」及び「青芋」）がこの群に属し、陸奥から九州まで最も広範囲にわたって分布していた。

唐芋群：「唐芋」は「ぼうどう」、「赤芋」、「紫芋」、「あかずいき」、「真芋」、「くろから」、「からくろ」など、各国で種々によばれていた。この群には少なくとも4品種（「唐芋」、「柄取芋」、「大芋」及び「白頭」）が含まれ、「柄取芋」は羽前や岩代のような比較的冷涼な国で栽培され、他の品種は下野、常陸、越中、加賀、周防、長門、対馬、筑前、肥後のような温暖な国に分布していた。

蓮芋群：この群は、他の群 *Colocasia esculenta* (L.) Schott に近縁な種 *C. gigantea* Hook.f. に属し、唯一の品種「蓮芋」を含む。「蓮芋」の葉柄は他の品種よりも数味が少なく、恐らく、江戸時代以前から専ら青物として利用されてきた。「蓮芋」は「白芋」、「唐芋」、「水芋」あるいは「天竺芋」ともよばれ、下野、常陸、美濃、和泉、備前、備中、長門、対馬、筑前、日向のような比較的温暖な国に分布していた。

蓮葉芋群：この群に属する品種は、資料には「蓮葉芋」の名称では記載がなく、「栗芋」、「鉢芋」、「股黒」あるいは「八つ頭」として知られていた。それらは下野、常陸、周防、長門、対馬及び筑前で栽培されていた。

八つ頭群：「八つ頭」は「八つ口」ともよばれ、下野、常陸、筑前、肥後及び日向で栽培されていた。

その他の群：それぞれ石川早生群と土垂群に属する「親責」と「与五郎芋」が伊賀で栽培されていた。また、薑芋群の「薑芋」が筑前で、溝芋群の「水芋」が肥後で栽培されていた。

## 引用文献

1. 青葉 高 (1976). 北国の野菜風土誌. 東北出版.
2. 青葉 高 (1983). 日本の野菜 葉菜類・根菜類. 八坂書房.
3. 青葉 高 (1984). 農書から見た野菜園芸技術. 農及園, 59, 381-386.
4. 青葉 高 (1989). 野菜の博物学. 講談社.
5. 衛藤淑子 (1992). 大分市近郊の食. 聞き書 大分の食事. 14-59. 農文協.
6. 福島貞雄 (1839-1842). 山田龍雄・飯沼二郎・岡 光夫編 耕作仕様書. 日本農書全集 22, 95-152. 1983. 農文協.
7. 浜田善利 (1985). 『熊府薬物会目録』所載の薬物の研究 (第1報) 主品三十種について. 薬史学雑誌, 20, 108-116.
8. 飛高義雄 (1951). 里芋. 松原茂樹編 蔬菜園芸ハンドブック下巻, 305-332. 産業図書.
9. 飛高義雄 (1952). 里芋の品種. 朝倉鑛造編 蔬菜品種解説, 135-142. 朝倉書店.



10. 飛高義雄 (1953). 里芋の品種とその栽培上の特性. 藤井健雄・清水 茂編 蔬菜園芸新説. 448-456. 朝倉書店.
11. 飛高義雄 (1977). サトイモ. 清水 茂監修 野菜園芸大辞典. 1032-1044. 養賢堂.
12. 人見必大 (1697). 島田勇雄訳 本朝食鑑. 1978. 平凡社.
13. 本多藤雄 (1986). ヤマノイモ. 西 貞夫監修 野菜種類・品種名考. 204-211. 農業技術協会.
14. 飯沼慾齋 (1856-1862). 牧野富太郎増訂 草木図説. 1912. 成美堂.
15. 稲村節子 (1992). 豊後水道沿岸の食. 聞き書 大分の食事. 60-107. 農文協.
16. 石井勇義 (1956). さといも属. 石井勇義編著 園芸大辞典 2. 1016-1023. 誠文堂新光社.
17. 市原洋子・岩下亜子 (1987). 阿蘇の食. 聞き書 熊本の食事. 14-77. 農文協.
18. 岩崎灌園 (1818). 草木育種. 藝能史研究会編 日本庶民文化史料集成 第九巻. 577. 1974. 三一書房.
19. 岩崎灌園 (1830-1844). 北村四郎監修 本草図譜. 1980-1981. 同朋舎.
20. 神宮司庁 (1911). 古事類苑 植物部. 1988. 吉川弘文堂.
21. 貝原益軒 (1704). 白井光太郎考証 大和本草. 1980. 有明書房.
22. 川上行藏 (1992). つれづれ日本食物史 第一巻. 12-14. 東京美術.
23. 越谷吾山 (1775). 古典資料研究会編 物類称呼. 1972. 藝林舎.
24. 熊沢三郎・本多藤雄 (1954). 里芋に於ける芽條変異と品種造成に対する考察. 園学雑. 3, 19-21.
25. 熊沢三郎・二井内清之・本多藤雄 (1956). 本邦における里芋の品種分類. 園学雑. 25, 1-10.
26. 熊澤三郎 (1967). 蔬菜園芸各論. 養賢堂.
27. 真砂久哉 (1987). 「紀州産物帳」「紀州産物絵図」「紀伊殿領分紀州勢州産物之内相残候絵図」「紀州在田郡広湯浅庄内産物」解題. 盛永俊太郎・安田 健編 享保・元文諸国産物帳集成 第VI巻 紀伊. 955-962. 霞ヶ関出版.
28. 松原茂樹・飛高義雄 (1970). Satoimo. 最新園芸大辞典編集委員会編 最新園芸大辞典. 2467-2475. 誠文堂新光社.
29. 松下幸子 (1982). 江戸料理読本. 柴田書店.
30. 源 順 (931). 名古屋市博物館編 和名類聚抄. 1992. 名古屋市博物館.
31. 宮永正運 (1789). 山田龍雄・飯沼二郎・岡 光夫・守田志郎編 私家農業談. 日本農書全集 6, 3-263. 1981. 農文協.
32. 宮負定雄 (1826). 山田龍雄・飯沼二郎・岡 光夫・守田志郎編 農業要集. 日本農書全集 3, 3-64. 1980. 農文協.
33. 宮負定雄 (1828). 山田龍雄・飯沼二郎・岡 光夫・守田志郎編 草木撰種録. 日本農書全集 3, 65-74. 1980. 農文協.
34. 宮崎貞巳・田代洋丞・金澤幸三・柳川政雄・田原 稔 (1986). サトイモの種芋及び幼植物に対するジベレリン酸処理による開花促進. 園学雑. 54, 450-459.
35. 宮崎貞巳・田代洋丞 (1992). 江戸時代の農書及び本草書類に記載されているサトイモの品種及び品種群について. 佐賀大農彙. 72, 1-36.
36. 盛永俊太郎・安田 健 (1978). 紀州在田郡広湯浅庄内産物. 享保・元文諸国産物帳集成 第VI巻 紀伊. 691-933. 1978. 農文協.
37. 中武サエコ (1991). 米良山地の食. 聞き書 宮崎の食事. 106-155. 1991. 農文協.
38. 日本大辞典刊行会 (1973). 国語大辞典 第三巻. 小学館.
39. 日本風俗史学会 (1978). 図説江戸時代食生活事典. 162. 雄山閣出版.
40. 日本植物友の会 (1972). 本田正次・佐藤達夫・松田 修監修 日本植物方言集 (草本類篇). 八坂書房.
41. 新村 出 (1983). 広辞苑. 岩波書店.
42. 西野 寛 (1974). 「いもぼう」で著名なエビイモ (海老芋=サトイモ). 農耕と園芸編 ふるさとの野菜. 211-213. 誠文堂新光社.
43. 野本寛一 (1987). 焼畑文化の形成. 大林太良編 山人の生業. 119-178. 中央公論社.
44. 農山漁村文化協会 (1993). 農山漁村文化協会編集部編 日本の食事事典II. 農文協.
45. 小野蘭山 (1803-1806). 杉本つとむ編 本草綱目啓蒙. 1974. 早稲田大学出版部.
46. 大野史朗 (1935). 農業事物起源集成. 青史社.
47. 大関増業 (1817). 山田龍雄・飯沼二郎・岡 光夫編 稼穡考. 日本農書全集 22. 95-152. 1983. 農文

- 協.
48. 佐々木高明(1961). 焼畑におけるイモ栽培についての覚書—根茎耕作文化の民族地理的研究序説—. 京大教養部「人文」第7集. 40-77.
49. 佐々木高明(1971). 稲作以前. 日本放送出版.
50. 佐々木高明(1972). 日本の焼畑. 古今書院.
51. 佐々木高明(1982). 照葉樹林文化の道. 日本放送出版.
52. 佐瀬与次右衛門(1684-1709). 山田龍雄・飯沼二郎・岡 光夫編 会津農書附録. 日本農書全集 19. 269-451. 1982. 農文協.
53. 下川義治(1916). 実験蔬菜園芸. 成美堂.
54. 下野敏見(1973). 田芋の栽培と儀礼—田芋列島の田芋民俗—. 民俗学評論. 10, 840-863.
55. 篠原捨喜・富樫常治(1951). 蔬菜園芸図編. 養賢堂.
56. 曾 榮・白尾国柱(1804). 鹿児島藩蔵版 成形成図説. 1933. 国本出版.
57. 僧 昌住(898). 澤瀉久孝編 新撰字鏡. 1944. 全国書房.
58. 杉山直儀(1993). 江戸時代のサトイモの品種. 農及園. 68, 250-256.
59. 高柳光寿・竹内理三(1991). 日本史辞典. 角川書店.
60. 高柳謙治(1989). 塊根類 サトイモ. 松尾孝嶺監修 植物遺伝資源集成 第2巻. 809-814. 講談社.
61. 竹田定之進・小野玄林(1738). 筑紫 豊監修 筑前国産物帳. 1975. 西日本新聞社.
62. 竹下昭人・宮崎貞巳・田代洋丞・柳川政雄・田原 稔(1991). 佐賀県鳥栖市に自生しているサトイモについて. 佐賀大農彙. 71, 113-122.
63. 田中政信(1993). 私信.
64. 谷川士清(1830-1862). 尾崎知光編 和訓栞. 1984. 勉声社.
65. 寺島良安(1712). 和漢三才図会刊行委員会編 和漢三才図会. 1975. 東京美術.
66. 富樫常治(1938). 実験蔬菜栽培講座. 養賢堂.
67. 徳川宗賢・佐藤亮一(1989). 日本方言大辞典. 小学館.
68. 月川雅夫(1990). 長崎ジャガイモ発達史. 長崎県種馬鈴薯協会.
69. 著者不明(1688以前). 山田龍雄・飯沼二郎・岡 光夫・守田志郎編 百姓伝記 卷八一—卷十五. 日本農書全集 17. 3-336. 1989. 農文協.
70. 脇田雅彦(1990). 奥揖斐〈徳山〉の食. 聞き書 岐阜の食事. 214-265. 1990. 農文協.
71. 山脇道園(1669). 近世文学史研究の会編 増補下学集 下巻. 1968. 文化書房博文社.
72. 大和茂八(1986). サトイモ. 西 貞夫監修 野菜種類・品種名考. 211-214. 農業技術協会.
73. 屋代弘賢(1814以後). 国書刊行会編 古今要覧稿. 国書刊行会.
74. 安田 健(1988). 江戸諸国産物帳. 晶文社.
75. 吉田 元(1991). 日本の食と酒. 人文書院.
76. 吉武貞敏(1975). 「筑前国産物帳」解説. 筑紫 豊監修 筑前国産物帳. 50-51. 1975. 西日本新聞社.